

『中観心論頌』 目次

第1章	菩提心を捨てないこと	p 2
第2章	牟尼の禁戒に正しく依存すること	p 5
第3章	真如の智慧を探求する	p 6
第4章	声聞の真如に入る	p 34
第5章	瑜伽行派の真如に入る	p 40
第6章	サーンキヤ学派の真如に入る	p 49
第7章	ヴァイシェシカ学派の真如に入る	p 55
第8章	ヴェーダーンタ論者の真如に入る	p 58
第9章	ミーマーンサー学派の真如を確立する	
第10章	一切智者性の成立を示す	
第11章	礼讃と論の相を示す	

このテキストはダライ・ラマ法王による『中観心論註』法話会の参加者のための暫定的な試訳である。

[] はケンチェン・クンガ・ワンチュクの『中観心論註』の註釈部分であり、
() は用語の解説である。

サンスクリット語で、マディアマカ・フリダヤ・カーリカー (Madhyamaka-hṛdaya-kārika)
チベット語で、ウメー・ニンポー・ツィク・レウル・チェーパ (『中観心論頌』)

文殊師利童子に礼拝いたします

〔勇者に依存し、障りなく果報をもたらすことができるように、この論書を記すに当たって
帰敬偈を述べる〕

世尊は、真如とは〔比量によって知る〕善き考察ではなく、〔眼などによる〕五種の認識に
よって正しく知る行いではないので、
アーラヤ識の種のように土台があるのでもなく、〔自相と共相によって〕特徴付けられる対
象でもなく、〔これである、あれである、と言って〕考察する対象でもなく、〔自生の智慧
以外の他の〕知るべき対象でもなく、生成と消滅もなく、〔この二つがないので〕楽であり、

〔総持と捉われを〕よく考察することもなく、〔自他に対する〕現れがなく、色 (物質的存在)
と無色という相もなく、〔生成と消滅などを〕明らかにするものもなく、〔事物と無自
性の〕二つを対象とすることもなく、不二を対象とするのでもなく、寂靜〔なる智慧によっ
て悟るもの〕であり、〔勝義の〕心が従事する〔すべての〕対象を捨て、文字がないので
〔言説で述べることもできない。〕

文字によって誇張されているのは〔論争のためではなく、〕大悲の本質を備えた〔世尊が天
人と人間に〕説き示された教えは間違いのないものなので、〔身口意の三つの扉により〕敬
意を持って世尊に礼拝いたします。

〔ではどういう理由でこの論書を書いたのかというと、有情に対する〕利他行をなすために、
〔苦行などの〕禁戒により最も優れた大いなる悟りに心を向けて、〔菩提心を起こした者た
ちが、〕真如の甘露を投入するために〔この論書を書いたのであり、できる限りの〕力で少
し述べよう。〔とされているのは、著者がこの論書を書くにあたっての決意と約束の言葉
である。〕

第1章 菩提心を捨てないこと

1 〔論書のすべての主題を総括した観点から要約して示す〕

悟りに向けて菩提心を起こした者たちは、〔菩提心に心を従事させ、常に菩提心を〕捨て
ることなく、〔大乘の教えに述べられている〕牟尼の禁戒に正しく頼り、〔開かれた心です
べての仏典をよく考察し、教理と矛盾することなく〕真如を知ろうと願い求めることが、
〔自他の〕すべての目的を達成する行いである。

2 〔菩提心を捨てないことについて述べる〕

〔大いなる〕愛 (慈：楽を与えること)、慈悲 (悲：苦をなくすこと)、大いなる智慧によ
って飾られ、仏陀の種となるのは菩提心である。故に賢者たちがそれを捨てることはない。

3 〔菩提心を起こして何をするのかというと、〕

知性を備えた者は大いなる勇気を持ち、〔一切有情と自らを同等に受け入れて、〕他者の苦
しみに耐えかね、正しい精進を始める。〔自他の目的を果たすために良し悪しを知る〕力
を持った賢者たちは、

4

智慧の光を持たない〔盲人のような〕者たちの世界をご覧になることにより、地下にある不浄な輪廻から、自分がまず彼岸に至ってから〔世間の者たちをすべて〕解放することが正しい。

〔以上が、大いなる愛についての第1の解説である。〕

5

鋭い武器となる智慧を持つ〔菩薩なら〕誰でも、〔輪廻の〕束縛を断ち切って解放される。慈悲の本質を持つ者は、守護者を持たない苦しむ者たちが

6

輪廻の監獄に耐えきれず、執着などを誇張することで束縛されている。不放逸な者たちは酒を飲み、無明と眠りによって誤った行いをし、

7

妄分別という泥棒によって全ての善の集積を盗んだ者たちが、もし〔輪廻の苦しみから〕解放されなければ、力を持つ者の力とは、一体何の役に立つのか。

〔以上が、大いなる愛（慈）についての第2の解説である〕

8

誰かが〔自分の〕手の〔意識の〕力を成就し、欲望によって生じる衣食を楽しむなどの小さな幸せも、自分ひとりで〔友人や客に与えることなく吝嗇を動機として〕食べている。これも賢者〔が見たなら〕非難する。

9

〔宝珠などの7つの宝を享受する〕転輪王、帝釈天、〔三千世界を支配する〕梵天たちにとっても〔真如の意味を理解して甘露を得ることは〕大変稀なことである。故に、欲望〔や解脱を得ようという全ての執着〕を完全に断ち切って、〔物質的な小さな布施も〕方便による〔他者と〕共通のものと、

10

生を受け、老化と、最終的に死と、三種の苦しみなどは変わることがない。まとめると、全ての苦しみを鎮める真如の意味を理解する甘露こそ〔不死の境地を得るものであり、それ以外に一体〕何があるというのか。

〔以上が、大いなる愛（悲）についての第3の解説である。〕

11

さらに、以前煩惱という悪魔によって〔心相續を〕破壊されて、武器などで負傷した傷に塩を塗りこむように、苦しみという病にかかり、多くの苦しみを得た。

12

他の生において〔両親や友人〕など、私を愛と奉仕で助けてくれた人たちへのお返しに、利益を与えて無余涅槃の境地に導いていくより他に、一体何ができようか。

〔以上が、大いなる慈悲の心（大悲）についての第4の解説である。〕

13

〔施しをし、快い言葉をかけ、意味ある行いをし、見合った行いをするなどにより、〕利他行によって得た喜びの心を喜ぶ賢者たちが、よく燃える剣とよく似た輪廻の苦しみによって害されることはない。

〔以上が、大悲についての第1の解説である。〕

14

〔十善業の修行道を特に実践するのは、〕戒律を破らないことにより、〔自分と他者が地獄に墮ちるなど〕悪趣への全ての扉を断ち切るためである。

〔以上が、大悲についての第2の解説である。〕

〔これらによって、一切法について〕空の見解に馴染むことにより、〔自らの心の連続体が無明などの〕煩惱に従事することを克服するからである。

15

このように賢者たちは〔利他を成すために計り知れない〕福德を積むことにより、〔地獄などの〕六界の有情たちを花園における祝祭のように見るならば、輪廻の監獄による恐怖が起きることはない。

16

過失〔や欠点をたくさん〕見るため、輪廻に〔とどまることは〕なく、〔一切有情に対する〕慈悲の故に、涅槃の境地にもとどまらず、利他行を成すために禁戒を守る〔人たちは〕輪廻においてもまた、〔蓮華の花のように輪廻の汚れにまみれることなく〕そこにとどまる。

17

〔このように賢者たちは〕輪廻と涅槃の二つと、その二つ以外のところも見ることなく、〔偉大な〕賢者は二つの極端のどちらにもとどまらず、三界であってもそこにとどまる。

18

〔憶念、一切法をよく分析すること、精進、喜び、柔軟さ、禅定、平等心などの〕悟りの支分である7つの宝によって豊かになり、計り知れない功德を得るところである〔三十三天の〕天人と阿修羅に礼拝し〔供養して、〕聖なる法輪である四聖諦〔を唱えて12の様相〕をまわることを知り、

19

真珠の玉が出てくるような白い光として有名な汚れなき秋の満月の光のような12の素晴らしい論集によって、十方位のすべてに広くなされた、

20

三宝の系譜が途切れることなくとどまるために、全ての功德の源となる勝利者仏陀と菩薩たち、天人、ナーガなどの頭頂に教えがよくとどまるよう供物を整えて、

21

〔卓越した〕自他の目的を果たされるため、それらの方々は不住涅槃によくとどまられる。〔輪廻と寂靜の二つにとどまることがないからである。〕それ以外の〔声聞、独覚などは五蘊という〕体の連続体が途切れる〔だけで転生者が生じ、連続体の流れは〕途切れる。それらもまた涅槃であり、〔それらの者たちには煩惱の習気と所知障の習気があるからである。〕

22

たとえば、狐が象を持ち上げて脳を打ち砕き、違いを考えず〔劣った者を〕排除して、果てしない大海のような大地のマンダラを〔支配して〕持ち上げるとは考えない。

23

同様に、〔声聞・独覚など〕劣った者であっても、深遠で無上で広大な功德を持ち、〔世間と超世間の〕功德を数えきれないほど持つ源〔でもあるので、完全なる〕仏陀の境地を得たいという望みもない。

24

〔そこで無上正等覚に至りたいと望むなら、劣った者たちは、〕限りなく素晴らしい卓越した一切の功德の現れを制圧し、他のものより秀でた無上正等覚の仏陀の〔宝のような〕功德のお体に、智慧ある者の一体誰が発心を起こさないことなどだろうか。

25

利他行をなすための勇気と、〔菩提道次第の〕上士（上級者）のやり方を備えた者が、輪廻における限りない前世と来世において1日たりともとどまることはないが、〔ずっととどまるべきである。〕

〔以上が、大いなる慈悲（大悲）についての第3の解説である。〕

26

〔誰か教養のある〕賢者が長い間涅槃にとどまるなら、その人の功德は如来のように広く知られ高められていく。利他行をなす聖者たちが修行道に従って修行に入らないことなどだろうか。

〔以上が、大いなる慈悲（大悲）についての第4の解説である。〕

27

芭蕉樹の葉や水泡のように心髄のないこの体を、利他をなすための条件として成就させることにより、須弥山のように〔32相 80種好の〕心髄のあるものとして成就することはできない〔が、それをする価値はある。〕

28

良き人が慈悲を具えているならば、一瞬ごとに老化、死、病の土台となるこの体は、他者に幸せを生じる土台となる。

29

正法の灯火とともに、八つの有暇がないことを捨て、八つの有暇を〔菩提道次第の〕上土の実践によって結果が実るようにすることが正しい。

以上が、〔ケンチェン・クンガ・ワンチュクの〕『中観心論註』より「菩提心を捨てないこと」についての第1章である。

第2章 牟尼の禁戒に正しく依存する

30

このように〔三界の〕有情を利益するために、〔無上の〕大いなる悟りに向けて〔禁戒を区別せず正しい〕土台を取り、〔論理的な〕方法に合った〔如来の〕修行の道によく入った者たちは素晴らしい。

31 〔その修行道はどういうものかと言うと、〕

〔菩提心を捨てない〕とは、大いなる愛（慈）は一切有情に対する害意を持たないことであり、大いなる慈悲（悲）とは苦しむ有情を助け、〔大乘という〕正法を理解することに満足せず、有情に対して惜しみなく法を与えること（法施）である。

32

〔自分の過失を隠し、他者を騙すことのない〕正直な心と、〔傲慢さのない〕プライドを克服し、〔縁起を見たことにより〕心で真如を見て、他者の過失を知ること盲目であるなど、自分に過失が生じたことを非常に恐れることになる。

33

論議や世間の騒々しさと、世間のローカーヤタ学派（チャールヴァーカ、順世派：断見）の見解に背を向けて、功德のない人でも〔将来〕功德の流れが生じると考えて常に尊敬すべきである。

34

〔見返りや果報を望まない〕慈悲を生む布施により、人の集まり全ての〔三つの〕川の苦しみをすべて鎮めるため、一切智の境地を求める心が生じる。

35

〔知覚能力という六つの扉を慎む〕汚れのない戒律という水で〔三つの扉の汚れを〕清め、〔苦しみを喜んで受け入れ、害を与えるものに仕返しをせず、仏法を修行する苦しみを厭わない〕忍耐という陰陽鬘（左右から捻って作った陰陽の飾り）の白い数珠と禅定の智慧に努力して、

36

心の眼をよく開けて、〔煩惱という敵を鎮める〕論書を知り、世間の知恵に秀でて、自ら恥を知り、他者に対して罪を恥じるという衣を纏い、腰帯を〔強く〕締めている。

37

慈悲の黒い革を着て、信心という汚れなき剣と、憶念により知覚能力の扉を守り、堅固な支えの座がある。

38

〔天と人の卓越した全てのものを生じる〕大乘の大いなる喜びは〔三阿僧祇劫において積んだ資糧という〕苦行の森で正しく示し、〔体と心の柔軟性によって生じる〕四つの禪定の喜びの結果を食し、四念住（四つの注意深い考察）という享受対象を持つ。

39

〔般若波羅蜜など〕深遠で広大な經典群の全てを唱え、全ての罪を克服し、二諦に依存して、縁起を説かれた太陽のような仏陀の教えの解説は何度も繰り返し唱えるべきである。

40

成就の花は称賛の言葉とともに、十方位の全てに知名度の香りが遍在し、太陽のような完全なる仏陀に毎日途切れることなく供養し奉仕するべきである。

41

個別に観察するかまどの火で、不全なる全ての妄分別を焼き、無上なる境地に至るためにこのように牟尼の禁戒にとどまり、実践するべきである。

以上が、〔ケンチェン・クンガ・ワンチュクの〕『中観心論註』より「牟尼の禁戒に正しく依存する」ことについての第2章である。

第3章 真如の智慧の探求

42

智慧の眼を持つ者こそ眼を持つ者に他ならない。それによって真如という智慧の探求に専念する者が、智慧ある者と言えるからである。

43

たとえ盲目であっても、智慧ある者なら三界のすべてのもの、すなわち、見たいと思った遠くにあるもの、微細なレベルのもの、隠されたレベルのものを見る。

44

〔帝釈天のように〕千の眼を持っていても、智慧がなければ眼がないのと同じである。天界や解脱に至る正しい道とそうでない道を見極めることはできないからである。

45

智慧によって眼を開かれ、見ることと見ないことの違いを主張して、〔良い〕果報を得たいと望むことは毒や棘のようなものと知り、そのような望みを持って布施などの行いを実践してはならない。

46

〔ではどうするかと言うと、智慧ある者は〕慈悲の心で一切智の境地を得るために、三つの清浄を具えた布施、〔持戒〕などに精進し、〔一切智を得ることに対して〕心がとどまることはない。

47

智慧の甘露は乾きを癒し、遮られることのない灯明の光であり、解脱の良き館への階梯であり、煩惱という薪を焼き尽くす火である。

48

その智慧もまた、〔世俗と勝義の〕二諦に依存して二つの様相があると主張する。正しい意味を理解して、それに従うために、正しく世俗〔の真理〕を知るのである。

49

布施、福德、智慧の資糧を完全に極めて、それらの因〔がもたらす〕結果と、〔原因と結果の〕関係、〔一切法の〕特徴（相）などを知り、

50

愛と慈悲に瞑想し、有情を集め、熟させて、十二処に依存して、智慧を磨くことを知るべきである。

51

〔勝義の智慧を説き示すため、〕妄分別の網を余すところなく否定し、〔戯論を断ち切って、すべての戯論を〕寂靜にし、〔他者から知るのではなく〕個別に自ら知り、分別もなく、〔述べた対象ではない〕文字もなく、

52

同一と別異を離れ、汚れなき虚空のような真如に入ることなく入る智慧が、勝義の智慧である。

53

正しい世俗の階梯がなければ、正しい解脱の館の上に行くことなど賢者たちにとって不合理なことである。

54

真如〔について説明すると、大いなる解脱という〕良き館に登るには、正しい世俗の階梯がなければ可能ではない。なぜかというとそのようだからである。

55

賢者たちは心を〔息を吸い吐くことなどから始めて〕等引におくために、まず実際に努力すべきである。同様に、〔文法、論理学、工芸学、医学などの四つの学問の分野についての〕教えを聞くことによって得られる智慧〔にも精進すべきである。〕それ以外の〔考えることによって得られる〕智慧と〔瞑想を通して心をなじませることによって得られる〕智慧の因となるからである。

56

濁った水が〔風で〕揺れ動いている水面では、顔〔の映像〕を見ることができないように、心が等引におかれておらず、〔気が散漫で、害意、眠り、沈鬱、昂奮などの〕障害に覆われている心には〔一切法の〕真如を見ることはできない。

57

間違った道に行く象のような心は、対象となる堅固な柱に憶念という綱で強く縛り付け、智慧の鎖で順次制圧すべきである。

58

〔心が〕高揚〔し過ぎている〕時は、無常などに心を従事させて心を鎮め、沈鬱が生じたなら、広大な対象に瞑想することでそれを捨て去るべきである。

59

気が散乱している時は、散乱の兆候を過失と見て〔気を〕集中させるべきである。沈鬱に陥った時も、精進の利益を見ることにより自らを励ますべきである。

60

〔心が〕執着、怒り、無知（貪瞋痴）の泥によって汚れ、まだ抑制されていないなら、〔対象の〕醜さ、愛、縁起という清らかな水で洗うべきである。

61

〔心が分別から〕離れており、〔対象以外のものに気が散ることなく〕不動で、寂靜で、〔何を瞑想しても〕対象によくとどまり、〔様々な対象に導くことが〕柔軟になったことを知った上で、〔多くを修正することなく〕平らかな状態によくとどまりなさい。

62

心（知）が等引の状態に入って〔禪定が生じた〕なら、〔世俗の〕慣習的観点からそれを維持し、〔地・水・火・風・空などの〕事物の〔堅さ、湿潤、熱、軽くて動く、などを〕智慧によってこのように分析するべきである。

63

智慧によってよく分析するならば、これらのものは勝義〔の真理の現れ〕として存在しているのか、もしそうならば、これが真如であり、もしそうでなければ、真如を探求するべきである。

64

偏見に陥ってそれを希求する者は決して寂靜を悟ることはない。有為法と無為法は、〔五〕蘊、〔十二〕処、〔十八〕界である。

65

〔これらは〕煩惱の障りを断滅するために〔世尊が〕声聞たちに対してよく解説された。煩惱障と所知障という〔二つの〕汚れを滅するため、慈悲心を持つ〔大乘に従う〕者たちに説かれた。

66

〔これは不生、無自性、不滅などを示す〕粗いレベルであるため、最初に色蘊について考察すべきである。それもまた、最初に〔色蘊の因が〕生じ、このように示された〔粗いレベルの〕根拠によって〔考察される。〕

67

ここでは〔色蘊の因である〕(a: 主張命題) 地などは勝義〔のありように基づいていうならば、〕五大要素の自性〔である堅さ、湿潤など〕ではない。(b: 理由) なぜならば、〔因や条件が集まって〕作られたものであるから、それ自体の自性によって成立しておらず、因と条件を持つものなどであるため、〔それ自体の自性によって成立せず因と条件によって生じた、〕(c: 実例) たとえば、智慧と同様である。

68

(a) 地は、堅さの自性ではない。(b) なぜなら〔五大〕要素であるから。(c) たとえば、風と同様である。(a) 地の働きは維持することではない。(b) なぜならば、それ自体が因と条件をなすものだからである。(c) たとえば、水のように。

69

火もまたそのように、もし世俗のありようとして、地の自性が堅さであると考えたら、〔禅定を修行する〕瑜伽行者たちは〔地、水など〕これらのものに、〔遮られることなく〕出入りすることなどは不合理となるだろう。

70

禅定を修行する者が、禅定の力により、地を〔水のように〕湿潤の本質とすることもありえない。自性は変化することのないものだからである。あるいは、地の定義である堅さではなくなってしまうからである。

71

同様に、水、火、風〔などの定義〕も、湿潤などの自性ではない。それらの機能も、水によって集まり、火によって熟し、風によって揺れ動くことは不合理である。

72

風など〔のすべて〕も、世俗において〔湿潤などの〕資質が等しくなることはないと言っているのではなく、体の知覚能力(身根)の対象であるから、〔すべては五大〕要素であるため、地と同様である。

73

(a) 地、〔水〕などは実体を持って存在しているのではない。(b) なぜならば、〔多くのものが〕集まった、部分を持つものとして存在しているのでもないからであり、〔これらは〕存在しないからである。〔地、水など〕ここで示したものは皆、実体を持って成立しているのではないため、(c) たとえば、森と同様である。

74

(a) 地などの対象をみる心もまた、実体がないと主張する。(b) なぜならば、因があるからであり、〔最終的には〕消滅するからである。(c) たとえば、〔麝香の木や柏の木など多くの木の集まりである〕森などを一つのものと捉える心のようなものである。

75

(a) 地などを示す言葉を述べることも、実体を持って存在しているのではないと主張する。(b) なぜならば、聞くものだからであり、(c) たとえば軍隊や〔森〕などを示す言葉には、実体がないようなものである。

76

(a) ペラーシャの樹やスパンダナの樹などのそれぞれによって、森が構成されるとは主張していない。(b) [これらのそれぞれもまた、] 因などを持つものなので、理由に依存して [存在しているからである。] (c) [たとえば] 木の根 [や葉] など [のそれぞれは森ではないの] と同様である。

77

[もしそうならば、] (a) 部分を持つ森はペラーシャの樹などによって構成されているのではない。(b) それらのそれぞれには [森の定義が] 完結していないからである。(c) たとえば、枝 [や葉] などのそれぞれは、森ではないのと同様である。

78

(a) 森という言葉は不特定多数の実体の数に適用されるのではない。(b) なぜならば、特別な観念 (心) によって誇張されているからである。(a) たとえば、水瓶、銅鍋、真珠] などの言葉 [が水瓶ではないの] と同様である。

79

(a) 色 (物質的存在) は勝義において眼根の把握対象ではない。(b) なぜならば、[多くの微粒子が集まった] 集合体だからである。(c) たとえば、[眼が] 音 [を捉えないのと] 同様であり、[五大] 要素によって成り立っているものなので真如と同様である。

80

[これと同様に] (a) 色は眼が捉える対象ではない。(b) [五大] 要素から生じたからであり、[(c) たとえば、自らの知覚能力の] 色 (物質的存在) を見ることはないからである。あるいは、(b) 楽 [と苦] などまた [五大] 要素という因から生じたからであり、言葉で述べる対象であるため、味など [が色を見ることがないのと] と同様である。

81

同様に、色は [五大] 要素から生じたものではない。(b) なぜならば、五大要素を持つからであり、(c) [たとえば、] 火 [や水] などと同様である。(b) 原因を持つなどの理由により、[五大は自らの色と同様である。] あるいは、心と同様に、[五大から生じたのではないと] 知るべきである。

82

以上により、[青などの] 色、形態、[短いなど] の形と、[微粒子など] の集まりや、[シラミの卵のような] 微細なもの、[山などの] 粗大なものなどの分類によって、色の特徴 (相) が [他の言葉によって] 考察されるが、

83

[これまでに考察し、分析した] 論理によって否定されることを理解するべきである。[同様に、] 声 [は3つ、] 香 [は3つ]、味 [は6つ、] 触 [は11] を否定する方法も [前に述べた色の十二処の否定方法と] 同様である。

84

(a) 眼根は勝義において色を見ることはない。(b) [なぜならば眼根は、] 心王 (主な心) ・心所 (心から派生する様々な機能) 以外の別異の [心を持たない] ものだからである。(c) たとえば、山の知覚能力によって色を見ないのと同様である。

85

あるいはまた、(a) 眼根は勝義において色を見ることはない。(b) なぜならば、] 意識が自性を持たない時は、対象を見る作用は生じないからである。(c) [たとえば、眼の] 皮などと同様である。

86

(a) 眼は色という対象を持つものではない。(b) [なぜならば、眼根は] 自らの色を捉えることはないからである。聞く [という耳などの] 知覚能力と、色 (物質的存在) を持つものは同等であるからである。(c) [たとえば、] 味などと同様である。

87

同様に、〔ここでサンーンキヤ学派とヴァイシェーシカ学派が主張するように、〕眼を持たない見る人を見る、という例えも存在しないので、〔勝義において色を〕見ることはない。〔それならば〕見る人の本質を持つ人が、どうして色を見るのが正しいというのか。

88

見る人の本質を持たない人がどうやって色を見るというのか。〔それは正しくない。〕もし、〔サンーンキヤ学派が主張するように〕見る人が聞く人でもあるならば、どうしてその人が聞く人でもあることになるというのか。〔そうはならない。〕

89

(a) その人が認識力を持ち、常住であることも認めることはできない。

(b) その人は色を見ることと音を聞くことのどちらにもなりえるという特別性があるからである。(a)〔また、知る能力を持つ人は〕単一ではない。(b)〔なぜならば、見る人と聞く人という〕二つの手段を持つからである。(c)たとえば、他の人の体のようなものである。

90

(a) 同様に、眼根は色を対象とする〔作用の自性である〕は認められない。(b)なぜならば、精神的意識作用がない時は見る人とは別異だからである。(c)〔たとえば、〕聞く人の〔耳〕などと同様である。

91

(a)〔サンーンキヤ学派が主張するように、〕プルシャ（真我）が〔対象を享受する〕見る人であるということは正しくない。(b)〔なぜならば、〕眼などの〔知覚能力〕に依存しているからである。(c)〔たとえば〕意〔や心〕のように。(b)完全に変容することがあるからである。(b)同様に〔顔の〕映像が現れる水〔の表面〕のようなものだからである。

92

(a) 見る人の〔自我が〕どうして意と同様であると言うのか。(b)〔なぜならば、〕他の知覚能力によって〔他の対象を〕見ることはないからである。(a)意が真実であるならば、見るという〔作用の自性を〕認めることはできない。(b)自我（アートマン）と同様〔に色を見るとは認められないからである。〕

93

そうであるならば、〔意と眼など以外は〕見ることはなく、集まりには実体がないからである。〔森などの集まりは〕それと同様である。(a)〔しかし、世俗の言説において、心は〕行為者である。(b)〔無我もまた、内と外の他〕の有為法〔に依存して〕実際に成立しているからである。(c)〔たとえば、〕金剛鈴から音が生じるのと同様である。

94

(a) 眼が光を持つというのは正しくない。(b)〔なぜならば、〕知覚能力だからである。

(c) 例えば〔耳など〕他の知覚能力と同様であり、〔鳥やフクロウなど〕夜行性の動物の眼の結果が現れているのであり、知覚能力が現れているのではない。

95

〔サンーンキヤ学派が主張するように、〕(a) 眼は幸せと苦しみなどの本質ではない。(b) 事物だからである。(c) プルシャ（真我）には〔功德がないと主張する〕のと同様である。また、〔ある人たちが主張するように、〕(a) 眼は常に動いているのでもない。(b) 存在しているからである。(c)〔たとえば〕結果と同様である。

96

あるいは、(a) 眼は五遍行（常に存在して機能する5つの要素。心より派生する51の精神作用）ではない。〔サンーンキヤ学派の主張のように〕利他をなすため、水瓶〔などと〕同様である。あるいは、(a) 眼は常に遍在しているのではない。(b) 色を対象とする因だからである。(c) たとえば、色（物質的な存在）のように〔常に遍在しているのではないのと〕同様である。

10

97

(a) 眼は火を持っているのではない。(b) [なぜならば] 知覚能力だからである。(c) [たとえば、] 皮膚などと同様である。[またある人たちが主張するように、] (a) [眼は四] 大要素など[眼の] 本質は大きな火などでもない。

98

また、(a) 眼は対象と出会ってからそれを[捉えるの] ではない。(b) [眼の] 知覚能力だからである。(c) [たとえば、] 意根と同様である。また[心が生じる] 因だからであり、連続体の流れを持つものだからである。あるいは、(c) [たとえば] 色[や声] などと同様である。

99

(a) 鼻[や舌] などが対象と出会ってから捉えるとは認められない。(b) 外界の事物を実際に捉えるからであり、過去と未来を捉えることはないからである。(c) たとえば、眼根と同様である。

100

論証対象と同様にすでに否定されたため、体[と耳] などによって[理由が] 不確定になることはなく、眼、耳、意の3つの特徴は対象と出会わなくても捉えるものではない。

101

[以上、これまでに] 見ること[と見る心など] について詳しく述べたので、聞くこと、嗅ぐこと、味わうこと、身根などの集まりも確実に理解するべきである。

102

声、香、味、触を否定する方法も同様であり、賢者たちは開かれた心で理解したことを知るべきである。

[とこのように色蘊について考察したので、] 第二に、受蘊について考察する。

103

感覚作用もまた勝義において体験するものの本質ではない。[主に] 意識と同時に存在しているため、[たとえば、] それ以外の心所のようなものである。

104

(a) 楽[の感覚] もまた体と心を利益するものであるとは認められない。(b) [なぜならば、対象・知覚能力・意識の三つが集まって] 接触することにより生じるからである。

(c) [たとえば、自性がないことは] 他のものと同様である。

105

(a) 不苦不楽の感覚もそれだけでは認められない。(b) その結果欲求が生じるからであり、(c) [それ以外の] 他の[感覚もすべて] 同様である。[主な] 意識の自性もまた、否定されると述べられているからである。

106

[以上によって] 想蘊(識別作用)と行蘊(形成力)の二つも[また、受蘊がすでに否定されているので、]すでに述べ終えているため、賢者たちは開かれた心で理解したことをよく知るべきである。

107

(a) 意識もまた、勝義においては事物の識別を自性とするものではない。(b) なぜなら、対象を持つものだから。[陽炎を見て水があるという] 認識をするようなものである。あるいは、(c) 消滅する本質のものだからであり、灯火のようなものである。

108

[色など] 五蘊を完全に分析した上述のような論証によって、[色などの] 五蘊とともに[十八] 界もまた知るべきである。[十二] 処などもまた同様に知るべきである。

109

(a) [有為法の特徴である生・住・老化・滅の四つと、] 生成[の生成] など有為法の特徴を持つことは正しくない。(b) [なぜならばそれらは] 有為法であるから。また、有為

法であると理解すべきものであるから。(c) [たとえば] それ以外の他のものと同様である。

110

[そうであるならば、] 事物であるものもまた特徴を持たなければならないため、[特徴と見合ったものなどに] 自性による成立があるとは認められない。ゆえに[それらが有為法の特徴であることを論証する] 理由もまた意味が成立せず、意味が矛盾するものとなってしまう。

111

(a) [たとえば] 地の特徴(相)が、地自体によって堅固であるというのとは正しくない。
(b) 体の意識が生じる因であるから。(c) たとえば火の特徴が、火自体による特徴ではないようなものである。[特徴を持つものの土台と特徴は別異ではないから。]

112

(a) 牛の特徴は牛自体によって、背中のコブとのだらみなどであるとは認められない。(b) なぜならば、特別な観念によって名付けられているから。(c) たとえば、[牛自体は] ラバの特徴と同様である。

113

[自派の主張によって] 特徴を持つものの土台とその特徴が同じであるならば、どうやってそれが特徴となりうるのか。あるものが同一のものによって特徴づけられることはないからである。また、特徴が、特徴を持つものと別異であるならば、どうしてそれが特徴でありえよう。あるものが別異のものによって特徴づけられることはないからである。

114

(a) 勝義において、まだ去っていないものには、去ることがあるとは考えられない。(b) なぜなら、道の過程にあるから。また、去ることがまだ存在していないから。(c) たとえば、まだ他の去っていないものの場合と同様である。

115

すでに去ったものと、まだ去っていないものを離れて、現に去りつつあるものは考えられないので、勝義において現に去りつつあるものには去ることは認められない。

116

(a) すでに去ったところと、まだ去っていないところと言われる二つのものでないところにも去ることは存在しない。(b) 道の過程であるから。(c) 例えば、すでに去った過去と同様である。あるいはまだ去っていない未来の道と同様である。

117

[もしそうならば、勝義において] 去ることが成立しないから、去る主体は存在せず、それに去ることがあるとも認められない。(a) 去る主体でないものが去るというのは正しくない。(b) なぜなら、去ることと結びついていないから。(c) たとえば、先行するものの場合と同様である。

118

(a) それ自体が別のものと結びついた時、そこに去る主体という観念が生じる。(b) なぜなら、観念と言葉が付随するから。(c) たとえば、杖を持つものの場合と同様である、というヴァイシェーシカ学派の主張は正しくない。論理的に伴う同じ性質の実例が存在しないからである。

119

間断なく生起する諸行の流れに依存して、たとえば炎などの場合と同様に、去るという錯覚に基づいて去ることがある。これもまた、言説に基づいた世俗的なものに過ぎず、真如ではない。

120

(a) 仙人カピラの信徒たちが去る主体を想定する論法は、勝義におけるものではない。去る者は勝義において存在するというの正しくない。(b) 集合体は実体的な存在ではなく、あるいは〔集合体の対象は他のものから他のものへと〕動かないものだからである。

121

(a) 集合体は実体的存在である。(b) なぜならば、集合体の一部分が把握されなければ、全体が把握されないからである。(c) 例えば、それ自体と同様である、というサーンキヤ学派の主張は正しくない。すでに述べた通り、集合体は実体的存在ではないからである。

122 ab

余りの諸々の作用の否定についても、〔去る者、説法者などを〕否定する側〔の論法〕により、それについてはすでによく示し終えている。

122 cd

「もし、〔内なる〕自性が存在するのみであると主張するならば、〔それらに対して〕輪廻と束縛と、それらからの解脱が実在するため、諸法に自性があることは認められている」というならば、

123

その時これらの〔本質を論理的に〕分析してみるならば、〔輪廻と解脱の〕本質もすでに考察し終えているので、〔輪廻に自性はないと〕確認することはできず、その時どうやってそれが束縛であり、どこから解脱に〔至るのかという〕と、

124

〔輪廻と涅槃の両方において〕自性は存在しておらず、幻のように、夢のように、自らの因と条件の集まりによって、それ自体の本質により、特徴づけられて存在している。〔自派のある者たちが主張するように、〕名色（名称と形態：十二縁起の第4）の集まりと色蘊は勝義において輪廻のものではなく、有為法なので外界の地、水などは〔輪廻のものとは〕認められない。

125

名色が輪廻するのは勝義において正しくない。(b) なぜなら有為法であるから。(c) たとえば外界の地などが〔輪廻するとは〕認められないのと同様である。

126

(a) 名称と形態（名色）の集まりが勝義において〔どうやって解脱するというのか、〕解脱することはない。(b) 〔どうしてかという〕と、生成を持つからであり、消滅するからである。(c) たとえば外界の水などと同様である。

127

〔犢子部が主張する〕プトガラ（輪廻の人格的主体）は勝義において輪廻せず、また解脱しない。(b) なぜなら、〔音は心によって〕名付けられたものだからであり、家と同様だからである。あるいは、言説によって表現されるものであるから。(c) たとえば、香と同様である。

128

(a) あるいはプトガラは、〔勝義においては〕プトガラではない。(b) 因を持つからであり、(c) 水瓶と同様である。(b) 生成を持つため、消滅があるからである。知るべき認識対象であるため、〔五蘊が消滅すると、〕プトガラは生じないのと同様である。

129

(a) プトガラは言葉で表現できないものである。(b) ゆえに、実体があるものとして成立することなく、(c) 香や、白とか青などと述べることもできないので、石女の息子のよう〔その存在は〕不確定である。

130

同様に、〔五蘊の自性と、〕五蘊に対して〔サーンキヤ学派とヴァイシェシカ学派が主張するように、〕無我であり、〔ジャイナ教の主張するように〕命はなく、有情〔というもの

も外と内の問答によって主張されているようには] 存在していない。賢者たちの開かれた心によって何が正しいかを知るべきである。

131

(a) 身根と知覚能力の集まりにも、真如においては無我が主張されている。(b) 因が存在するからであり、(c) [たとえば] 柱と同様である。あるいは集合体であるため、蟻塚と同様である。

132

憶念、[自分に対して] 恥を知ること(慚)、意識の生成などの理由により、自我が存在することを受け入れるなら、[それらの] 理由は成立しない。

133

[それらを理由として、] 知覚能力を持つ身根には自我があるということが成立するならば、その理由は共通のものとはならず、それに実体があることにはならないからである。

134

(a) もし自我が、言葉の意味と同様ならば、[相對する] 矛盾するものに対しても[自我という] 名前を与えているので、(c) たとえば、[人を指す場合の] 「獅子」という名と同様であるというならば、自我が存在することは成立しないことになる。

135

もし、[世俗における] 意識の対象に、その意味どおりに他の人に[自我が存在することを] 成就させるなら、常住、五遍行など[の特徴を] 持たないことになるので、その理由は矛盾するものになってしまう。

(五遍行：常に存在して機能する5つの要素のこと)

136

故に、どんなものでも勝義においては束縛と解脱があるとは認められない。[以前に、] 去ったところ、まだ去っていないところ、今去りつつあるところが成立しなかったのと同様に、心についても残りを知るべきである。

137

[これについても、欲望と同時に生じる心には、執着という世俗の言説が与えられているならば、] 心の消滅に現前した生じた時に、[心は] 何に執着し、何によって執着されるのか。[さらに] 執着が消滅し、衰退してもなお執着が存在するとは認められない。

138

もし執着が生じつつある時、執着が[存在する] というならば、それはどんなものなのか。もし、それが生起に向かい、かつまだ生じていないというこの二者には、それが存在するとは認められない。土台がないものには作用がないからである。

139

[またこれと同様に、] 今生起しつつある心と、すでに生じた心と、まだ生じていない心について、それを言葉で述べることができなくても、執着は存在せず、[生じていても生じていなくても、] (a) 執着はない。(b) [生じたか生じていないかを] 言葉で述べることのできない心も執着ではない。(c) 言葉で述べることのできないから、欲望と同様である。

140

もし、心が、執着により完全に变化した意識が執着であると主張する時、(c) [たとえば、] 水晶に色を塗ったものに執着する心と同様である、[と言うならば、] その心はどのように執着の自性となるのかと言うのか。

141

このように[分析すると、] 欲望は[その意味を] 持たないので、欲望という分別は世俗の[心髄のない] ものである。欲望についてと同様に、あらゆる諸法についてもそれぞれに認識するべきである。

142

事物についても、〔毛布の色のように〕実体に依存していることが正しいならば、それにも〔個別の〕分類はなく、故に欲望はあるがままに存在し、心にも執着があることにはならない。

143

(a) 執着が、執着するものと別異であるとするのは正しくない。(b) なぜならば、執着するものが把握されなければ、それは把握されないからであり、(c) 執着するものそれ自体と同様である。

144

事物を識別する心には執着との区別がない。認識対象を共通のものとするからである。またそれ以外に区別の根拠はない。

145

したがって、〔因と条件がたくさん〕集まって、〔世俗のレベルの法が〕一つ生じ、それに依存して〔連続体の流れの〕集まりが生じる。言説に依存して、たとえば、〔根、幹、枝、葉、〕花が咲いた木などと同様である。

146

〔また、ある人が主張するように、〕欲望を捨てるために涅槃に至ることを望むが、それもまた正しくない。真如を得ることはないからであり、涅槃は勝義において、事物と無自性の特徴をどちらも持たないからである。

147

もし、涅槃が事物であるならば、(a) 事物であるがゆえにそれは有為法となる。(b) 〔それは欲望の〕対治法ではなく、有為法だからである。(c) たとえば、有為法である〔灯明などが〕消滅するのと同様である。

148

もし、涅槃が事物でないならば、(a) 他のものに依存していることになる。(b) 無自性だからであり、(c) 例えば、消滅は消滅の因に依存しているのと同様である。(a) その対治方法となるものは認められない。(b) 自ら他のものに依存しているため、(c) 消滅と同様である。

149

それが無為法であることも正しくない。消滅という過失が上記に示されているからである。サーンキヤ学派がよく考察しているように、解放された心は〔不生であり、不滅であるなどの主張と〕一体どんな違いがあるというのか。

150

煩惱は、妄分別という火付けの木を擦ることで生じるがそれは自然に消えるものである。それが集積されないのなら、あなた方が解脱を得ることは因なしに起こることになってしまう。

151

〔また一切法には〕不生起のものも存在しない。同様に〔生じるものも何もないので〕これにおいてどちらも同等である。これは同様に論じられる。つまり、解脱は何を滅尽することによってあるのか。それとも滅尽しないものを滅尽することによってあるのか、これを論じるべきであるが、そのいずれでもありえない。

152

自性が空であることを理解することによって、理解する人の戯論のある心も一切の戯論を滅するのであり、尽きるものは何もないので、無尽の真如を得て、得るものも何もないのである。

153

正しい意味をあるがままに完全に理解し、自らを利益する人は、邪見の病と悪臭に侵されてこのようなものを抛り所とすることはない。障りとなる悪い言葉に依存することもない。

154

顛倒〔という汚れ〕が存在するためその〔悪臭〕も存在する。顛倒した分別が存在するからであり、欲望が存在するという主張は認められない。欲望と同様に、〔顛倒した分別も考察されるべきであり、そのような分別にも〔自性がないのでそれは〕世俗のものである。

155

心王と心所の自性は顛倒した妄分別の自性であるため、〔すでに〕否定されているので、〔因と条件などによる〕欲望と執着は事物として何も存在していない。

156

〔欲望には自性がないことを示す〕ことにより、瞋恚（怒り）と痴（無知）などのすべては、個別にそれぞれ知るべきである。そうであるならば、束縛と解脱を得ることはなく、〔一切法には〕自性がないので、不動である。

157

〔サーンキヤ学派と古代インドの勝論派：ヴァイシェシカ学派の仙人：他人の残りの米を拾って食べる修行者のように〕

(a) 勝義において、地は地それ自体と別異ではないと認めることはできない。(b) なぜならば、原因を持つからである。(c) 例えば風と同様である。(b) あるいは、事物であるから。(c) プルシャ（認識主体）と同様である。

158

(a) 勝義において、水は地と別異のものとして認識されていない。(b) なぜならば、生起を持つからである。(c) 例えば地それ自体が地と別個のものでないのと同様である。

159

「地についての言葉や心に相違があるから、」あるいは、「作用や特徴に相違があるから、」という理由により、地などがそれぞれ別異であるとされるのは認められない。〔これに対して提示される実例は〕論証されるべき述語（所立法）を持たないからである。

160

〔色とそれ自体とに〕相違がない場合でも、「色のそれ自体」と表現される場合があるので、「言葉や観念には相違がある」という理由には疑いがある。また、「言葉や観念には相違がある」と想定されたことが成立しないので、この理由は意味不成立となる。

162

〔ジャイナ教の人々は、地や水などの〕違いを〔個別に〕述べることにより、その両者〔であること〕を認めているが、〔その特徴（相）が〕矛盾しているため、両者とも確実に退転することになる。両者であるということ自体が不合理であり、互いに矛盾しているため、〔例えば、〕火に寒さと熱の〔両者が存在するとうのは矛盾しているのと〕同様である。

163

〔さらに、〕別異であることと別異でないことの両者の否定はすでに示されているため、〔両者ではないという〕主張もよいものではない。〔火などには、タントラの加持によって暑さと寒さの〕両者の本質があると示されるとしても、〔すべての〕世界で広く知られていることを実例として示すこと〔があなたには欠如しているので、言説における真如には広く知られる共通の例えが存在しない。〕そうであるならば、他には実例は存在せず、〔分別が〕生じることはない。

164

〔暑さと寒さなどは〕互いに依存して成立しているので、この両者以外に何らかの道理に合うものが以前から成立していないなら、〔それを述べてみよ。〕それは成立しないので、〔分別のある意（心）で考察するしかない。〕

165

両者が成立すると述べるすべての論者たちにとっても、その否定方法は同じである。このように、〔自性による成立がないということが〕成就されたので、〔どのような現象にも〕自性の存在は成立しない。

166

16

以上のように、有為法がまとめて考察された。
無為法については、二種類の滅と、虚空と、真如についてである。

167

- (a) 勝義において、個別に分析することは止滅であり、事物が存在することではない。
- (b) 常住不変であるから。自性は不変だから。(c) 石女の息子の体のようなものである。

168

〔無為法は〕不生であり、無因であるから。同様に、行為も持たないからである。有為法にまとめられることはなく、〔究極的には〕止滅もまた存在しないからである。

169

- (a) Aの結果がBと考えられる場合、AはBの原因ではない。(b) 不生などの理由によるからであり、(c) たとえば、象の頭の角〔が獅子座の原因ではないのと〕同様である。

170

〔止滅は不生のものを原因とする結果であると説かれるが、〕(a) 結果は不生のものを原因とするとは認められないと確定されている。(b) なぜならば、結果であるから。(c) たとえば蜂蜜が、虚空の華を原因としないのと同様である。

171

それにより、虚空、真如、空間、時間、自我など、無為法であるいかなるものも否定されていると賢者は知るべきである。

172

実体、根本物質、生命など、非仏教徒たちによって認識対象として想定されているものをみな、論理と聖典に明るい者はそれぞれに応じて否定するべきである。

173

このように、自他の〔学派によって想定された自我は無我である、〕と諸々の存在について明確に知った上で、賢者たちは無我を理解して、真如を知る甘露を飲むべきである。

174

あるいは、妄分別の網によって連続体や事物の生成が存在するという囚われに依存して、凡夫たちは心がかき乱されている。

175

賢者は穢れなき明知の灯火により、〔事物の〕正しいありようを完全に理解して、その時生じた〔すべての戯論を〕否定して〔妄分別を〕鎮め、〔究極的にすべての見解の〕戯論を鎮める。

176

さてここでまず、(a) それ自体より生起するというのは世俗のレベルにおいても正しくない。(b) なぜならば、それ自体ですでに存在することが成立しているからである。(c) たとえば、すでに成立したヨーグルトはそれ自体から生じたのではないのと同様である。

177

- (a) 事物はそれ自体から生じることはない。(b) 事物であるから。(c) たとえばプルシヤ(我、真我、人)と同様である。(a) また、不生のものに自我はない。(b) 不生であるから。(c) 虚空の華は虚空より生じたのではないのと同様である。

178

虚空の華が存在しないのは、虚空など〔の中にある華〕や、〔サーンキヤ学派の〕あなた方が主張することは、虚空の華ではない。故に、我々の側には実例がないのではない。

179

〔サーンキヤ学派は、〕「結果Aにとって原因Bは〔同一であって〕それ自体であり、AがBから生起すると考えられている。それ自体から生起するということは、事物がすべてそのような〔原因〕Aより生起することだと認められる」と考えている。

180

〔そうだとすれば、結果〕それ自体と同様に、それとは別異ではないので、原因は結果と同じであり、原因ではないものとなる。また〔根本物質（プラクリティ）・真我（プルシャ）などは〕生起しないものであるため、何が何の原因であり、あるいはまた原因でないのか。

181

すでにそれ自体が存在する時、その存在について原因を想定することは無駄である。あるものがそのものから生起するわけであり、生起させるものと生起させられるものが同一となるから。

182

「もしミルクが、〔その結果である〕ヨーグルトとしての状態にあるので、害はない」と考えるならば、〔それは正しくない。〕〔たとえば、〕父親はその子どもとしての状態にはないので、〔その理由によって〕害がないわけではない。

183

〔不生の〕逆は、〔生起を持つことであり、勝義においては〕存在しないので、理由が矛盾していても認めることはできない。故に、まず事物の全てがそれ自体から生じるとするのは正しくない。

184

自性が存在しないので、何が何と別異であると認められるだろうか。馬の角が牛の角や、山の頂と別異であるとは認められないのである。

185

(a) 眼など他の条件となるものは、勝義において眼識を生むことはない。(b) なぜならば、他のものだから。(c) ヴィーラナ草と同様である。

186

(a) 色の認識（眼識）は眼などと言われるものを原因とするとは認められない。(b) なぜならば、他のものであるから。また、あらかじめ存在するものではないから。(c) たとえば、壺、布などと同様である。

187

生起しないものを他のものとするのは世俗的あことであって、真実としてではない。このように、他のものから生起することも正しくないと理解される。

188

すでに生じたものは〔どのようなありようをするのか〕明確に表現できないとしても、それが生起することは無意味である。(a) 未だ生じないものは生じない。(c) 虚空の華と同様であり、(b) 生じることがないからである。

189

現在生じつつあるものが生起するとすれば、問題点は同じである。(b) 〔すでに生じたとも、未だ生じないとも、〕表現不能であるから。(c) それ以外のものと同様であり、(a) 表現不可能なものも生起することはありえない。

190

(a) あるいは、眼などは、考察された本質によって空であり、作られたものなので、滅するものであり、(c) たとえば、幻のミルクのようなものである。

191

(a) 論証対象と同様に否定されるため、もう一方の〔考察されていない事物〕は〔自性もまた〕疑いなく〔空と同等である。〕幻のような本質のものを多く分析してみても、真実としては虚偽であると認められる。

192

〔魔術師の作り出した物質的存在は、たとえば賢者の〕(b) あるものたちが欲望を生じる因となるからであり、(c) 例えば幻を調べるのと同様である。一般的に認められた部分によってその実例が成立するので、実例の欠如は存在しない。

193

あるいはまた、(a) 勝義において、眼などは自性が空である。(b) なぜならば、作られたものだからである。消滅するからである。(c) たとえば、悪魔が作り出した仏陀と同様である。

194

(a) 事物の自性は勝義においては自性ではない。(b) なぜならば、作られたものだからである。(c) 例えば、水が熱いこと、あるいは固いことと同様である。

195

事物がそれ自体で生起することはいえぬ。また、他のものとして生起することも認められない。例えば、牛がラバとして生起することは認められない。

196

因などの他の〔四つの〕条件より生起するというのが見られるのは世俗のレベル〔の錯乱〕である。故に、これのみを受け入れるのは論理によって害されることがないので、それら(四縁)は勝義において成立していない。

(四縁：1) 因と条件、2) 所縁縁。認識対象という条件、3) 増上縁。全ての間接的な条件、4) 直接因となる条件。等無間縁。間をおかず直後に生じる条件。)

197

〔自性の〕存在が〔因と〕条件によって生じるのは認められない。存在しないことも認められず、あることもないことも、〔両者共に認められない〕からである。それ以外には、〔あることもないこともどちらもない〕のと同様である。

198

(a) 因は結果を生むことはない。(b) なぜならば、それは空であるから。(c) それ以外のものと同様である。また、(a) 生起しようとしているものは、それによって生起することはない。(b) なぜならば、先に存在することがなかったから。(c) それ以外のものと同様である。

199

この因は、未だに生じないもの、今生じつつあるもの、あるいはすでに生じたものを生起することはない。その誤りがすでに述べられているし、また事物が生起しないからである。故に、因縁は勝義におけるものではない。

200

(a) すでに生じた〔意識〕は条件と結びつくことはない。(b) すでに生じたものもまた、生成に意味はないからであり、まだ生じていないものもまた、生じていないからである。(c) たとえば、未だに生じていない認識の土台と同様である。

201

今生じつつあるものに出会うと考えるならば、それもまた対象がなくてはならない。部分的に不完全な〔今生じつつあるものに〕生起の作用が行き渡るとは認められない。

202

あるいは、(a) 勝義において、心と心所(心から派生する様々な働き)が所縁(認識対象)を持つとは決して認められない。(b) なぜならば、今生じつつあるのもだから、あるいは、把握対象だから。(c) 色(物質的存在)と同様である。

203

あるいはまた、それらの対象が〔所縁(認識対象)と結びつくのかもしれないが、同時にであれば、それも正しくない。このように分析するならば、対象が存在しないので、〔何が〕何の対象となるというのか。

204

(a) 未だ消滅していないものに消滅はない。(b) 虚空の華と同様に生じることがないからである。(a) すでに消滅したものに消滅はない。(b) なぜならすでに消滅しているからであり、(c) 死者と同様である。

205

(a) 未だ消滅していないものに消滅はない。(b) なぜならまだ消滅していないから。(c) 今機能している灯火と同様である。今、消滅しつつあるものに〔消滅があるとは〕認められない。その否定が先に述べられているからである。

206

〔今消滅しつつあるものは、〕同時か、あるいは異なる時〔に消滅しつつある〕ことになる。しかしそのいずれも、今消滅しつつあるのだから、阿羅漢の最後の心と同様に、縁（条件）とはなりえない。

207

〔勝義において、(b) 生起することは存在しないので、(a) 事物が存在することは正しくない。(c) たとえば、石女の子供が存在することを主張するのと同様である。したがって増上縁（全ての間接的な条件）は認められない。〕

208

結果が空であるか、あるいは空でないかの条件が増上縁であると言うならば、(a) 空ではなく、(b) それによって空なのであり、(c) 例えば、眼〔根〕は、音を捉える心によって空と同様だからである。

209

大地をならすことなどにとどまって、〔連続体の〕因のみが存在する一部には、〔大麦などが生じないようなものである。〕

結果が以前から存在しているならば、その結果は生じず、存在しないので、あなた方にとっての結果はどこにあるというのか。

210

もし、結果の潜在能力のみ〔がとどまっていること〕が結果であるというならば、その潜在能力とは別の一体何があるというのか。それ以外の他のものでもないならば、〔酒や毒の潜在能力のような〕土台とその事物も結果としては認められない。

211

例えば結果という名前のみについて言うならば、結果は認められず、例えば、虚空に虚空がとどまる、と述べるようなものである。もし真如もまた因ならば、どんな結果によってその因も存在すると言うのか。

212

故に、結果が存在するならば、生起は存在しないため、そうだとすれば、何が何に対して増上縁であると認められるのか。また、今存在しないものには縁（条件）はありえないので、そうだとするなら、何が何に対して増上縁と認められるだろうか。

213

水瓶などは、すでに生じたものであることが現実に体験される。現実に体験されることについての論証には意味がない。現実に経験されることと、一般的に広く知られていることがそれを撃退するものとなる、と言うならば、

214

水瓶などが生起することが現実に凡夫の心と同様に、世俗のレベルのものとして見られるのだから、何のためにそれが私たちによって否定されるのか。故に、このように述べることの過失はない。

215

色（物質的存在）を対象とする認識は、勝義において自ら覚知されるものではない。〔現実の体験は勝義のものではない。〕それ自体が生起することがないので、私たちにとってはその現実体験による排斥は、排斥とならないからである。

216

(a) 勝義において、直接知覚の認識が対象物に見合ったものであるとするのは正しくない。

(b) なぜならば、愚か者の認識と区別されないからである。(c) たとえば、回転する火の輪を、旋火輪であると認識するのと同様である。

217

(a) その直接知覚の対象領域は、事物ではない。(b) なぜならば、有為法だから。(c) 例えば、自我（アートマン）の認識と同様である。また、〔対象領域となる色（物質的存在）なども、実体を持つものではないため、直接知覚は私たちを排斥することはない。

218

一般的に認められていることは、賢者の立場からの分析を排斥することはない。無明に覆われて盲目になっている人の言葉は勝義における主題とはならない。

219

〔サーンキヤ学派が主張するように〕すでに存在する結果が粗大なものになることはない。〔粗大なものは〕以前から存在しないからであり、のちに〔生じたというのも〕正しくないからである。眼に現れるどんな粗大なものも、〔勝義において成立する〕条件となる、自性によって作られたのではなく、〔粗大な性質は〕以前には存在しないため、壺作りが〔水瓶などを作る〕のと同様である。

220

また、(a) 眼の粗大性はその条件によっては作られない。(b) なぜならば、それは以前に存在しないから。(c) 例えば、水瓶と同様である。あるいは、(b) 認識対象であるから。(c) 享受する者（つまり、プルシャ）と同様である。

221

その人は認識対象であるため、〔粗大な事物にはならないが、〕享受者のようなものである。〔世俗の言説においては、心は〕享受者など世俗における共通のものであると主張されているので、私たちにとってはいかなる時も、たとえば成立しないという過失にはならない。

222

(a) もし、〔粘土を水瓶の形に作るという増上因（間接的条件）によって〕明らかに存在するようになる、とすることに過失はないと言うならば、(c) 例えば、何が何によって明らかに存在するようになるのか。〔と問うならば、〕(c) もし、これらはこのようにして、例えば、灯火によって〔闇の中の〕水瓶が明らかに映し出されるのと同様である。

223

〔以前から〕存在するものが実際に明らかにされる、と言うならば、世俗の言説においても、灯火は水瓶を光とともに明らかにするものであり、〔すでに存在するものが明らかになるのではない。〕あるいは、〔以前に存在しなかった〕観念が作り出され、その逆となる〔闇の観念が〕生じるのである。

224

明らかに存在しないものが明らかになることはない。(b) なぜならば、明らかに存在するものではないから。(c) 例えば、虚空の華と同様である。あるいは、〔サーンキヤ学派〕によって、(c) たとえば、享受者（つまり、プルシャ：真我）とプラクリティ（根本物質）と同様である。

225

〔三つの特質の自性を持つ〕根本物質〔と言われるものが〕享受者であるように示されている。〔その享受者も〕明らかに存在するようになるとすれば、享受する者は遍在する者ではなく、原因のないものではなく、意識を持つ者でもなく、実際に明らかではないものも存在するという特徴はなくなる。

226

根本物質が明らかに存在するようになれば、あなたの言う根本物質がそれ自体で明らかに存在する者であることになる。しかし、それが結果であるとき、どうしてそれが明らかでないものとして存在することなどできようか。

227

(a) AがBを明らかに存在させるものとして認められる場合、AはBを明らかに存在させるものとは考えられない。(b) 原因であることなどの理由により、(c) 例えば糸などが、ヨーグルトでないものに対する場合と同様である。

228

[サーンキヤ学派の主張では、] 糸なども[ヨーグルトの]潜在能力を持つとされるので、[それを認めない場合、] 実例が欠如することになる、と言うならば、それは正しくない。それらの糸などは糸などとしての存在状態のままでその[ヨーグルト]を明らかに存在させるものではないからである。

229

自他の双方より生起することは認められず、自我[の自性によって事物]が存在することもしないことも認められない。存在し、かつ存在しないという両者を主張することも認められない。これらは以前に考察済みだからである。

230

(a) 世俗によっても、結果が諸条件によって明らかに存在するようになるとは認められない。(b) なぜならば、その結果が破壊されるまで、継続的に付随するからであり、(c) たとえば、水瓶に対する粘土などの場合と同様である。

231

(a) 世俗においても、眼が原因なしに生じるとは認められない。(b) なぜならば、それが一般性と特別性に結びついているからであり、(c) 例えば、地など水瓶の場合と同様である。

232

また、(a) 結果であるから、順次生じてくるものなので、[究極的に] (b) 消滅するからであり、[他のものから他のものへ]と前後して(b) 完全に変容するから、(b) 原因と条件によって規定づけられているから。また生起するから。

233 (ローカーヤタ学派に対する批判)

(a) 他の生で滅した土塊が生起するとは認められない。(c) たとえば、水瓶と同様に、(b) 消滅するから、あるいは、結果だからである。

234

しかし、水瓶としてすでに消滅した水瓶が、水瓶として生じることはない。土塊はそれと同様であると認めるなら、まさに[我々の]認めていることが論証されるのである。

235

[前に出てきたあなた方の論証において、]「理由が消滅するから」とは、「原因がすでに滅したから」ということであるならば、やはりその理由は矛盾する。またそれが、「個体的持続としては滅していないとしても、[消滅するから]」と言うことだとすると、やはりその理由は混乱をもたらすものとなる。

236

(a) 胎内で始まる認識には、それ以前において直前に滅した認識が存在する。(b) なぜならば、認識対象の相違によって、それに相違があるから、あるいは、認識であるから、(c) 例えば、それ以後のものと同様である。

237

チャイトラについては、[チャイトラという]言葉の認識と、その形態の認識が生じる。この場合、(b) 認識対象に相違があるから、(a) その二者は同一ではない。(c) たとえば、個人の心相続が異なる[他人の]二つの認識と同様である。

238

従って、来世を成立させるため、あるいは、例えが存在しないのではなく、心だから[という理由のみにより、]連続体の異なる心は一つではない。そうであるならば、他者の連続体の心によって、理由が混乱をもたらすからである。

239

22

ここで、前世は存在しないと主張する凡夫のローカーヤタ学派〔チャールヴァーカ、順世派〕の虚無論者が、(a) 有情が死ぬ時の心には他の心が結合することはない。(b) なぜならば、死ぬ時の心だからである。(c) 〔例えば、〕阿羅漢の最後の心と同様であり、心相続が途切れるからである。

240

しかし、この理由は不確定であり、前世における過去の死に向かう心が不確定だからである。前世における記憶などが存在し、〔前世において自分や他者の行いのように話したりすることが存在するからであり、〔前世もまたこのように〕存在する。

241

さらに、聖者でない凡夫が死ぬ時の心は、来世の心が他者に生じるのであり、無明という煩惱とともにあるため、現在の心によって来世の心が生み出されるようなものである。

242

〔また虚無論者が言う。〕(a) 体、根、心は、自らの業によって生じるとは私たちは認めない。(b) なぜならば、消滅するからである。(c) たとえば、水瓶〔に執着するの〕と同様である。従って、後の世は存在しない。

243

あるものがそれと同じものによって作られず、またそれ以外のものによって作られないため、からだは自己の業、あるいはそれ以外のものによって生じたものではない。この点は、我々にとって何になるのか？

244

あなたの主張が、「体などは業によって生じたものではない」というのであれば、それについての実例は存在しない。〔この場合は樹木などが実例となるというかもしれないが、〕樹木などが然るべき時に生じるのは、有情の業の力によるものである。

245

それは、地獄と天上界において、それぞれ剣と如意樹が生じるのと同様である。四大要素から、それと全く特性を異にする心がどうして生じるだろうか。

246

〔もし業の力によるものではないならば、物質的存在である四大〕要素から意識が生じ、特徴も異なるものがどうして生じるのか、〔と問うならば、まず最初に、〕(c) 例えば、心を持たない四大要素から意識を持つものが生じ、生起を持つものであるため、たとえばそれは〔酒の力による狂気〕、あるいは、隕石（太陽石）から生じる火と同様である。

247

しかし、(a) 酒の力には意識は存在しないので、あなたにとっては実例の欠如が存在する。(b) なぜならば、同じ種類のものが原因となっているからであり、あなたが主張する理由は矛盾している。

248

(a) 〔水などの〕内面的な四大要素にも意識は存在しない。(b) なぜならば、地などは物質的な存在だからであり、四大要素であるからである。(c) 〔地、水など〕それ以外のものと同様である。

249

従って、母胎の中で〔呼吸が始まる前から〕心王と心所という別のものが先行していることを賢者たちは知るべきである。捉われであるため、〔誕生したなら〕その状況により〔心は前世の意識から次の世に生じる〕ようなものである。

250

(a) 〔例えば、〕子猿は、以前から習慣になっていたものに基づいて、母から生まれたと同時に食べ物を探す。〔そして立ち上がったと同時に〕(b) 食べ物を探すために歩き回るからである。(c) 例えば、知覚能力が熟した〔幼児期と青年期など〕と同様である。

251

〔食べ物のために歩き回るのだから、〕磁石〔のために動かされる〕小石のように、理由が不確定なのではない。また、食べ物を食べることを実際に経験するので、理由が不成立なのでもない。

252

自在天（シヴァ）は世界の創造主ではない。（b）ある一部の人のために喜びの原因であるから、（c）例えば、喜びを与える神が、創造主である自在天ではないのと同様である。

253

（a）自在天が一切有情の因であるとは認められない。（b）〔自在天は〕生起しないから、〔自在天を生み出す〕因が他にないからである。（c）たとえば、虚空の華が〔一切有情の〕因とは認められないのと同様である。

254

そうであるならば、（a）〔自在天は〕一切有情の因ではない。（b）なぜならば、心を持つものであるから。（c）例えば、牛飼いが、一切有情の因でないのと同様である。

255

〔それのみならず、〕自在天は単一なわけではない。事物は皆、因と条件が多く集まって成立しているからである。その創造主が単一であるというのはいかなる理由も認められない。故に、〔理由が〕不確定なのではない。

256

もし、眼などの〔知覚能力が〕自在天とともにあり、〔眼などは多数なので自在天の〕奴隷であるというならば、それは不生であるため、唯一の自在天が〔奴隷の主であると言うのは〕成立しない。自在天から離れて、不生であるから不生であるというのはいかなる理由も認められない。〔虚空の華〕のようなものとなる。

257

（a）もし、〔眼などに〕創造主があると主張するならば、〔それは他のものによって〕整えられたものなので、（c）水瓶などのようなものである。というならば、もし特別な特徴を示さない創造者であるならば、すでに成立している。

258

しかし、常住で、単一で、微細なものであるなどの特徴づけをして「創造者」というならば、あなたにとってそれを成立させる事例がないため、あなたが用意したものは、無常であり、形を持つものなので、生じたものであるという過失が生じる。

259

もし、有情世間と器世間と言われる世界が持つ多様性の因となる業が自在天であるというならば、〔我々仏教徒にとっては〕世俗においてすでに成立しており、あなたによってよく成立されている。

260

〔この論理によって、〕時間、プルシャ（真我）、プラクリティ（根本物質）、微粒子、ヴィシュヌ神が、一切有情の因ではないことをよく理解するべきである。

261

もし、〔62の〕見解の闇を晴らす〔因となる〕諸仏がこの世に現れるため、〔眼などの〕十二処もまた生成すると主張するならば、〔それは返答として正しくない。従ってこれらの16の見解は最初の始まりに依存しており、44の見解は後の終わりに依存しており、2つの見解は現在に依存しているならば、〕三世の全ては存在せず、生成が存在しないなら、時間は何を見て、何に依存すると主張するのか。

262

〔三世のすべてが勝義において〕存在しないと理解することができるので、仏陀が現れたことは〔世俗において〕なされたことである。

263

もし、〔先行する〕神でないものが神と別異でないならば、どうして恒常論にならないのか。また、もし〔先行する〕神でないものが神と別異であるならば、どうして断滅論にならないのか。

264

もし、水瓶のように、〔同一とも別異とも〕表現できないとしても、どうして断滅論が退けられるだろうか。また、〔同一であり、〕かつ〔同一でない〕としても、涅槃においてはそのうちの一方を超えることはない。

265

もし、すでに滅した〔前の五蘊〕が生起するならば、どうして恒常論にならないのか。また、もしすでに滅した〔前の五蘊〕が生起しないとすれば、どうして断滅論にならないのか。

266

連続体の流れは後では成立しないのだから、どうして断滅論と恒常論がありえよう。それは存在しないのだから、不生とすることは断滅論でも恒常論でもないものとして、〔二つとも存在しないのが正しい〕。

267

諸仏は苦しみが生起しないことを目的として法を説かれた。したがって、〔苦しみの生起がないという〕その結果が存在するので、〔苦しみが〕生起すると主張するならば、

268

このように、苦しみの生起が認められたとしても、前に述べた通り〔勝義において、4種の分類による解釈方法より不生であるため、〕不生であるだけが結果なのではない。不生であることを完全に知った結果なので、〔その苦しみは〕自ら作り出したものであると言うのは正しくない。

269

真如によって真如が作られたのではないのだから、他のものによって作られたと言うのも認められない。他のものによって他のものが作られたというのも矛盾しているため、苦しみが自らの心相続に〔勝義において〕生じることは認められない。

270

〔自らの心相続の流れには〕有情の自我など存在しないからであり、実体によって成立していないからであり、〔個別の〕分類がないため、苦しみにはその連続体もない。

271

(a) 勝義において、眼などの有為法は真如において生成を持つものである。(b) なぜならば、「有情」という言葉で表わされるから。(c) 例えば、諸仏と同様であり、生起が存在することが成立している。

272

しかし、我々にとって仏陀は〔勝義において〕生起を本質とするものではない。したがって、それが存在することはなく、同様に、それは生起するものとして存在しているのではない。自我（アートマン）と同様に、あるいは幻と同様に、〔世俗において〕それは存在する。

273

〔また、仏陀の色身は〔32相 80種好を具えた〕正しいものであり、(a) 勝義において、仏陀ではないと理解すべきものなので、(c) 例えば、転法輪王のように、その意識も〔仏陀では〕ない。自分と他者に様々な現れとして生じてくるため、魔術のようなものである。〕

274

そうであるならば、色蘊も仏陀ではなく、〔もし仏陀なら〕五蘊によって集められた仏陀であると主張しているので、〔その五蘊は〕生成し消滅するものであるため、認識対象であり、色（そのお身体）は仏陀ではないようなものである。

275

では、〔仏陀の〕お身体が仏陀であることは不合理であり、それは壊れて消滅するという過失を持つものであり、それ以外の特徴がないからであり、自我（アートマン）のように、それがどうして存在しうると言うのか。

276

〔諸蘊と同一とも別異とも〕述べることはできず、実体のないものが〔仏陀〕であるとは認められない。前に述べた通りそれは否定されているからである。あるいは、水瓶の場合と同様に言説でのべることはできないので、それが仏陀であるとどうして認められようか。

277

縁起を見ることにより、一切法と仏陀を見るのだから、諸々の十二処が生起するとは認められない。前に述べた通りそれは否定されているからである。

278

自我から、他のものから、その両者から、因なしに生起するのではない。また、存在するもの、存在しないもの、常住のもの、無常でないものに、他のものと他のものでないものが生じることなく、常住と断滅をすべて離れているからである。

279

〔縁起は〕生じるものでもなく、生じないものでもなく、また、生じかつ生じないものでもない。では、それは一体いかなるものであろうか。〔一切の戯論を離れて〕それを見るならば、師を見ることにより、どうやって知るべきなのか。

280

故に、事物に自性があると述べる者にとって、「縁起を見ることによって仏陀を見る」という言葉は、自らの承認を排斥するものである。しかし、生起を幻の生起に等しいとする者にとって、その言明は正しい。

281

他者の述べる言葉の誤りという垢をすべて除去して、正法の灯火を輝かせることにより、仏陀が見られるが、それは他者を利益するものとしてであり、世俗のレベルのものである。

282

幻に等しいものは勝義のものではないので、真如を見るということではなく、勝義において見ることなきものであり、また思考されないものであり、識別されないものであり、考察されないものであり、比類なきものである。

283

相がなく、現れもなく、分別を離れ、文字を離れ、二元の現れのない見解を持つ心で理解すべきである。見ることなくそれを見ることは、勝義において、それ自体からでなく、他のものからでなく、その両者からでもなく、無因からでもなく、あるのでもないのでもなく、それ以外の他のものからでもない。

284

以上の様に、勝義においては、〔いかなる存在も、いかなる在り方においても、〕それ自体より生じず、他より生じず、自他の双方より生じず、原因無くして生じず、また、今存在するものとして生じず、今存在しないものとして生じず、この二者以外のものとしても生じない。

285

また、いかなる存在も、いかなるありようも、ヴィシュヌ神、自在天（シヴァ）、プルシャ（真我）、プラクリティ（根本物質）、微粒子などの原因から生じることなく、事物は全く存在しないのでもない。

286

そこにおいては、自性、作用、特徴を持つ土台となる現象とその特徴を示し、唯一のもの、他のもの、煩惱とその対策を完全に浄化することに依存して、

287

たとえば、空中で鞭を打ち振ること、彩り豊かな絵を描くこと、あるいは空中で種をまくなどは不生のものであり、すべての分別もまた不生である。

288

例えば、白内障がなくなれば、そのため眼が清らかで無垢にになった人は、〔白内障のために見えていた〕毛髪や、二個の月、孔雀の羽にある目のごときものをもはや見ることはない。

289

それと同様に、煩惱障、所知障という白内障がなくなれば、そのために眼が一切智を得て、無垢になった賢者は、何ものをも見ることがない。

290

例えば、人は眠っていると、眠りの影響で子供、女、宮殿、館などを見ることがあるが、目覚めるともはやそれを見ることはない。

291

それと同様に、世俗のレベルで把握していた錯乱した意識は、真如を見た人の心によって目が開かれて、無知の眠りをなくし、目覚めるとそれをもはや見ることはない。

292

例えば、人は夜中に、ありもしない悪霊を闇の中に見るが、目をはっきり見開いているか、太陽が昇るかすると、それを見ることはない。

293

それと同様に、賢者の正しい意識という太陽によって、その人の凡庸な無知の習気が破壊された時、賢者は心王と心所の〔様々な戯論を持つ〕対象を見ることはない。

294

(b) 事物の自性が成立しないから、あるいは、自性が生起することはないから、(c) 幻の象と同様に、事物には自性があると賢者は見ることがない。

295

世俗において、(b) 生起を持つから、あるいは原因を持つから、(c) 幻の象と同様に、(a) 事物には自性があると賢者は見ることがない。

296

(a) 「事物は存在しない」という認識は、対象物に見合ったものではない。(b) なぜならば、妄分別の知によって生じるものだからである。(c) 例えば、案山子を「人」と見る認識が生じるのと同様である。

297

あるいは、(a) 正しくない心によって存在すると見た事物を誤った認識であると認めるが、(b) それは妄分別による錯乱した意識の対象であるため、(c) 例えば、陽炎を水だと思う心が生じるようなものである。

298

〔このように、〕ある〔という捉われと〕、ない〔という捉われのある〕心は理解する作用を遮断するため、〔このように〕賢者たちは無分別の心によって、不生というやり方で生じる現れと、

299

一切法は空性であるため、それが空でないという観点からも無分別の心であると認めることはない。これは前同様に否定されているからである。

300

空性もまた、空性である、などにより、自性が空であるため、賢者たちは空性に対しても空性と見ることがない。

301

(a) 事物の本質として顕現しなくても、無分別の対象も対象に見合ったものではない。(b) なぜならば、対象として把握されるものであるから。(c) たとえば、水に映った月を「月である」と認識する場合と同様である。

302

(a) 妄分別を離れた事物を対象とする認識も虚妄である。(b) なぜならば、それを対象とする行いだからである。(c) たとえば、水に映った月の映像を月だと思ふ心が生じるようなものである。

303

無分別という〔勝義における〕対象を持つ心に、分別がなくてもそれは偽りであり、〔無始の時より〕分別対象となる無我などの自性であるため、(c) 例えば、分別のある心であっても、最初から不生であるようなものである。

304

〔究極のありようである〕真如を悟ったため、どのような現象に対しても認識を起こさない者が本物の仏陀である。妄分別〔の眠り〕を壊滅させたためであり、無分別によって〔得るべきものを全て得た〕ためである。

305

認識対象となる一切法が常に成立しないため、どのような法に対しても無分別の心の本質が生じて存在するのではない。完全に認識対象を極めて、〔一切法の全てを〕平等観察智とし、真如を知ることにより、法を説かれたのである。

306

一切法はそれぞれ特徴を異にするにも関わらず、それらは生じず、滅することなく、一切法は平等であるという平等性と、それ自体も他のものもすべて自我の本質のように平等である。

307

人と神を含むこの世界で、〔そのような平等性を〕把握しないというありようにより、正等覚者となる。ゆえに、正等覚しないありようにより、正等覚者となるため、その人は正等覚者と呼ばれるのである。

308

一切法を明らかにし、平等になすこともないので、真如というあるがままの状態にとどまっている。故にその方は如来である。

309

悟るべきものを確立し、極端論に陥ることを捨て去って、無分別の状態で悟ることが善逝であり、如来である。

310

覚者は、その悟るところが無量であるため、無量なるものであり、把握されることがないので、数えられないものであり、心によって把握されないため、計り知れないものであり、例示するものもないので示すことのできないものである。

311

こうであると決定できないので、常に決定できないものであり、特徴がないので特徴なきものであり、寂靜を害するものがないので吉祥なるものである。

312

どの点においても妄分別を離れ、それ自体として顕現することがないため常住であるから、常住なるものと言われる。また、常に有情の目的を成就するので、常住なるものと言われる。

313

自性が空であるから、寂靜なるものであり、自性がないから特徴がないものである。特別な相を持たないために、それには特別の相がない。

314

顕現しないため無顕現であり、その点からして、覚者は特別な相を持たない。覚者を見たいと願う人々が慈悲を持っていても、彼らにとって覚者は特別な相を持たず、無顕現のものである。

315

特別な相を持たないから、固定しないものであり、固定的でないから妄分別を離れたものである。妄分別を持たないから虚構の言葉を離れたものであり、それを把握しないから認識対象を離れたものである。

316

生起を離れ、行相を離れ、変化を離れ、光り輝き、〔空である点で諸法と〕平等であり、〔声聞・独覚とは〕共通でなく、無限であり、妄分別を離れ、特別な相を持たない。

317

そのような覚者を偉大であり、虚空に等しいと、見ないありようによって見る人がいる。彼らの目は、特別な相にとどまっていなかったため、無垢なのである。

318

礼拝することと、〔それに伴って〕心を従事させること、言葉を否認していながら、彼らは守護者に礼拝する。〔我々は〕そのような人々にも心から礼拝する。

319

覚者などという表現は、仮に託したものであり、論証対象に従ってつけられたものである。全ての点で、妄分別を離れているから、真如において覚者は表現不可能なものなのである。

320

覚者についての言語表現は後退し、覚者は心の対象領域でもない。思考は後退し、意識が従事することもない。

321

無限の福德の蓄積を持ち、無量の認識対象を知る諸仏の法身は、虚構の言葉を寂滅し、吉祥である。

322

肉眼によって見ることはできず、天眼によっても見られない。妄分別を伴う知によっても、妄分別を伴わない知によっても、この法身を見ることは難しい。

323

悪人にとっての天上界、葛藤のあるものにとって無葛藤の状態、生まれつきの盲人にとっての太陽のごとく、〔法身は〕論理学者の対象領域ではない。

324

存在するのでもなく、存在しないのでもなく、存在しかつ存在しないのでもなく、それらと別異のものでもなく、また別のありようでもない。〔他の学派で説かれる自我（アートマン）と異なり、〕微細でもなく、大きくもなく、単一でもなく、離れてあるのでもなく、近くにあるのでもない。

325

どんなありようによっても、いかなるものもこれから生じることはなく、顕現することもない。誰もこれにとどまらず、誰もこの中に融け入ることはない。

326

梵天などによって把握されないもの、それは聖なる梵天である。それは聖なる真実であると言われている。牟尼は真実を述べることでそれを説かれた。

327

これは聖観自在であり、聖文殊菩薩など、賢者である牟尼の多くが近親の修行をせずに修行するものである。

328

覚者と自性が区別されず、覚者によって真如が知られたのだから、それは如来の身であると認められる。しかしその真如を知ることがないので、如来以外のものの体ではない。

329

このことを十分修習し、対象を把握しない状態にある者の心は、何に執着し、何に怒り、何に惑わされるのか。

330

愛しきものから別れ、憎きものに出会うなどから生じる苦しみが、どうして覚者にあるだろうか。覚者は名声などの世間一法に汚されることはない。蓮華が水に汚されないのと同様に。

331

輪廻から出ることなく、しかも輪廻に煩わされない。涅槃に達することなく、しかもすでに涅槃に住しているがごとくである。

332

煩惱の火に悩まされず、しかも煩惱があっても虚空のごとくである。無心であり、しかも無心でもなく、心の統一を拠り所としている。

333

牟尼は般若という須弥山の頂に登り、自らは何の悲嘆もなく、しかも慈悲心にかられて、世界が悲嘆に暮れて悩まされ、苦しんでいるのをご覧になる。

334

その時、牟尼は慈悲心に潤った眼によって世間の人々が妄分別に耐えられず、妄分別の網に覆われているのをご覧になる。

335

世間は、生・老・病・死・悲嘆という矢のために傷を負い病んでいる。弱く衰れで、行き着くところは悪く、導く人もなく、目標も持っていない。

336

苦しみの寂滅を願いながらも、大きな苦しみの濁流に落ち、愚かにも苦しみの原因を増大させることに努力している。

337

吉祥で、虚構の言語が寂滅した秋空のように、曇りなき真如の甘露について、世間はその認識行動に光明はなく、眼も持っていない。

338

〔このような世間を見て、〕慈悲心に苦しめられ、世間に利益を与えることに献身する者は、金剛の山のごとく堅固な心を持ち、賢明なる最高の存在である。

339

般若の憶念をまず先として、時と能力に応じて、牟尼は布施、持戒、忍耐、精進、禅定、般若に努力する。

340

布施などの山に源を発し、福德によって水が無垢になった清らかな谷川を、一切有情の利益のために、牟尼は流出させる。

3451

いかなる時も、およそ外と内の事物によって、それを求める全てのものから窮乏と渴望による苦しみを取り除く。

342

求める者たちの思いを満たし、刹那ごとに心を喜ばせ、いかなる時も尽きることなく果報をもたらし、如意宝珠となる。

343

牟尼はまさに善趣に生まれ、それは他者の安楽と利益を生む。また、自ら望んで悪趣に生まれるが、それは他者の安楽と利益を生むためである。

344

赴く所々で、牟尼は信愛厚く清らかで、優れた無数の眷属を持ち、海とごとき多くの方角から流れ込む福德の濁流に満たされる。

345

活動力があり、散乱しない心を持ち、認識対象を把握して識別する生まれながらの認識力を備え、自ら望むだけの長い劫に渡って生存するだろう。（命自在）

346

心を統一した無数・無量の獲得によって認識力ある者となる。（心自在）

また無数の世界を諸々の莊嚴によって飾る。(財自在)

347

技術工芸と事業を行い、行いの成熟を示す。(業自在)

世界に利益を与えようと願い、自分の思い通りに生まれる。(生自在)

348

仏の姿によって満たされた諸々の世界を示す。(勝解自在)

自分が思う時に正等覚を得る。(願自在)

349

智慧の眼によって全ての認識対象の真如を示す。(智自在)

諸法の確立を知り、名称などを得る。(法自在)

350

神通力を開示し、無数の世界を振動させる。

一度に、あるいは順次に、体から火炎を出して雨を降らせる。

351

あらゆる無数の方向を自己の光明で遍満させ、神などに厭離を生ぜしめるため、地獄などを示す。

352

無量、未曾有、不可思議な功德という宝石に光り輝く世間の人々の親族たる諸仏と集まった人々を示す。

353

望むことがあれば、大きな山塊を金、摩尼、猫目石、真珠、金剛石、蒼玉に変え、また火を冷たいものに変える。

354

金剛石などの中にあっても、何も妨げることのない巨大な体で、稀有なことに一刹那の間にあらゆる方向を往来する。

355

無数の世界が自己の体の中に、あるいは一つの微粒子の中に入ることを示し、しかもその世界の有情に苦痛を与えることがない。

356

望むことがあれば、世界を微粒子と等しく、微粒子をその世界の大きさにし、また縮小し、拡大し、上を下に、下を上に変える。

357

それに等しい大きさ、光輝、色、声、立ち居振る舞いを備えて梵天の神などの集まりを迎える。

358

牟尼はそこで誰にも知られずに姿を表したり消したりする。また、慈悲心にかられて、他人を制圧する。

359

望みに従って、世間の人々を生まれたところの言語に精通させ、また弁才に欠ける者には弁才の安らぎを与える。

360

地獄で苦しみに痛めつけられている人たちを寂靜にするために光明を放ち、良きところと同じようなところへ来させる。

361

対象となる弟子に応じて、作り出された諸々の化身によって諸方を満たし、教説という法の雨により、この世のものならぬ喜びを生む。

362

三世に渡って無量の体を示し、仏国土を備えさせ、無数の世界を展開してまた破壊する。

363

自己のからだにおいて善逝の国土を、その国土において自己のからだを、自己の国土において善逝のからだを、それぞれ望むままに現実とする。

364

〔声は〕光明より出され、毛穴、塔、あるいは中空よりまた諸々の化身より出されて、聞いて快い。

365

隅々にまで行き渡り、澄んでいて、カラヴィンカの鳥の声のように心が喜ばしく、低く、あるいは高く響き、声は諸世間を満たす。

366

対象となる弟子を教化するために、その理解力と能力の次第により、寂靜一味で吉祥なる法をそのような声で多様に説く。（神通自在）

367

煩悩のある心、惰眠のある心、正常な心、苦樂などを伴う心、劣った心、中程度の心、優れた心、正しい誓願を持つ心など、

368

誰にとって、どこで、いかなる状態で、またどれくらいの間、生きとし生けるものたちのそのような心が存在するのか。どれほど多くのものの心であっても、牟尼はそれを知るのである。（知心差別智通）

369

常に色（物質的存在）は、神の眼によって天眼を持つものが見る。（天眼智通）

370

天人的なもの、聖的なもの、大きなもの、化作によるもの、明瞭なもの、人間のもの、遠方のもの、またそれらと反対のもの、これらの音を、天耳を持つ者は聞く。（天耳智通）

371

それがどんなところにおいてであれ、一切有情、あるいは自己の過去における生を、その時の名前・家系などの区別によって牟尼は回想する。また、他人にそれを回想させる。（随念宿住智通）

372

諸々の生まれた場所において、生きとし生けるものが望ましい、あるいは望ましくない業果を得た状態にあり、今死につつあり、死んでしまい、そして生まれるということを、それがどんなところであれ、牟尼は知る。（見死生智通）

373

無数の世界において、兜率天に居ること、そこからの死去と、等覚することを示すことにより、牟尼は弟子たちを教化する。

374

牟尼は、望むことがあれば無数の世界にある塵の数に等しい体を出して、自らは自己の国土から動くことなく、しかもその数に等しい世界においてである。

375

そのように、自分の望みによって無数の体を作り出し、それぞれのからだにおいてそれに応じた数の手と頭を、またそれぞれ一つずつの舌を作り出す。

376

〔それらの手に持たれた〕香と華の皿は多彩にして、ガンジス川の砂の数に等しく、量は須弥山ほどであり、最高の香りを振りまく。

377

世界に利益をもたらすという点で、最高の者である牟尼は、信心に潤されて完全に目覚めた等覚者に対して、そのような香りある華で供養して、賛辞によって幾度も賛嘆する。

378

真珠の網で飾られて、計り知れず大きく、宝石の光が芽や牙のように積然と輝く傘や天蓋などで、正等覚者たちに対して供養をなす。

379

心を奪う棟と光り輝く柱を持ち、真珠の玉の緒をかけて、彩り豊かで高貴な多数の宝石が散りばめられ、絵が描かれた楼閣、

380

百の灯火にも等しいきらめく宝石の光で輝き、天空にそびえ、諸方をその光で満たす楼閣、そのような楼閣で正等覚者に対して供養をする。

381

賢明なる者は、彼らより多様な教説を幾度となく聞き、また一字一句も増減せずそれを他の人々のために語る。

382

無数の無量なる劫の間に、福德と智の蓄積を増大させ、六波羅蜜の彼岸に至り、かくのごとくして牟尼は最高の人間である。

383

正等覚者の太陽となり、得ようとする覚知で蓮華の池を悟らせて、花開かせる。それ自体無垢で、他の垢を取り除く教説の光によって。

384

涼やかさをもたらし、冷たい光を発する月、または白檀のためにこよなく冷えた教説の水によって、煩惱の火に悩む生きとし生けるものの苦しみを取り除く。

385

生を繰り返す苦しみが渦巻き、死のワニがいる生存の大海から、速やかに三乗の大船に乗って人々を救い出す。

386

激しい乾きを排除する自己の教説という宝石の大河によって、世の中の人々が無始の時以来、功德に乏しい状態にあることを取り除く。

387

生存の森に走り込み、無明によって法を説く人を、牟尼は涅槃へと導き、般若によって目を開かせる。

388

煩惱という蛇に噛まれ、自己の利益維持のために圧倒されそうな世の人々を、牟尼は智と明知の教えによって正しく治癒させる。

389

生存の中であって、導く者もなく、長い間無知の眠りを貪っていた有情たちを、牟尼は慈悲心のために教説という太鼓の音で目覚めさせる。

390

長い間、輪廻の牢獄の中に渴愛の鎖で縛り付けられていた有情たちを、その束縛から解放してやる。四魔（煩惱・五蘊・死・神の子）を征服することによって。

391

供物を食い尽くす火のように、天人、あるいは人間の欲求に満足しない有情たちを牟尼は満足させる。清浄なる般若の甘露の味によって。

392

象のように調教し難い他の学派の者たちが智におごり高ぶること、それを取り除く空性という獅子の大音声を牟尼は集まりの中で轟かせる。

393 〔仏陀の報身と化身について〕

その姿は虹のごとき円光に包まれ、確固として円満なる 32 相 80 種好の吉祥を持ち、

394

幸福を飾りとなし、心と眼を奪い、すべての美しさを制圧し、対比すべきものがない。

395

そのような姿と 60 種類の声によって、牟尼は天人、人間、阿修羅たちの心を引きつける。

牟尼は如意宝珠にも匹敵する体と言葉によって、弟子を教化する目的のために、すべてのものの主として、すべての姿をとって現れる。

396

以上の如き無数・無量・未曾有な功德の宝庫たる偉大な賢者は、今まで述べたことに依存してそれを獲得する。

以上が〔ケンチェン・クンガ・ワンチュクの〕『中観心論註』より「真如の智慧の探求」についての第3章である。

第4章 声聞の真如に入る

397

〔ここで大乘の仏陀の教えを成就するには、このように深遠なる智慧を修行して、〕理解するのが難しい〔大乘の〕この流儀には理解力が少し足りないが、とどまるべきでない恐しい劣った乗り物に熱望を持つ者たちは、何度も繰り返し問答を始めるべきである。

398

(a) 師の説かれた無分別の心の智慧は、〔32相 80種好の〕お身体に依存しないものであり、(b) 体をもつものなので、(c) 〔たとえば、〕牧牛者の体に依存することなく、あるがままに述べられている。

399

〔ここで〕正しい見解(正見)、〔正しい考え(正思惟)、正しい言葉(正語)、正しい行為(正業)、正しい暮らし(正命)、正しい努力(正精進)、正しい憶念(正念)、正しい禅定(正定)〕の八正道によって、〔究極的に〕偉大な無上正等覚に導いていくため、正しくよく理解するべきである。

400

悟りに至るため、〔例えば、声聞・独覚より〕特別に優れた〔所知障を捨てた認識対象を余すところなく〕一切智の智慧としている。〔例えば、声聞乗の四聖諦を対象とした〕一つの道であっても、〔シャーリプトラの智慧と、ムガルヤナの神通力のように、知覚能力の〕違いを主張するのと同様である。

401

〔反論者が言う。大乘の〕あるものが個別に正しい明知によって、〔煩惱の習気である〕所知障を滅することもまた、〔声聞乗の〕修行道それ自体によっている。心から派生した障りであるから、煩惱の障りという究極のありようのようなものであると主張している。

402

大乘仏教であっても、四聖諦を対象とするこの修行道によって、認識対象を全て知る牟尼もまた仏陀となることができるのであり、〔大乘は声聞という乗り物とは〕別異のものだからである。〔例えば、四聖諦を対象とする〕独覚の乗り物と同様である、と認められている。

403

〔さらに、〕経蔵、〔律蔵など〕大乘と言われているものは含まれていないからであり、〔我々の修行道からは〕別異の道を示しているのもまた、大乘は仏陀の教えではないとして、〔ガンジス川で沐浴すれば罪が全て清められると述べる〕ヴェーダーンタ学派の見解と同様である。

404

〔空性を全て受け入れているため、〕断見同様、因と結果などは存在しないとしており、〔根本的に華嚴宗と阿羅漢の二つより、華嚴宗の八つと、阿羅漢の十派を合わせて〕18の学派が存在するが、この中に属しているけれども仏陀の教えでないことは確かである。

405

色、声などを対象とするすべての心には、自証分が存在するが、現量によって害されるものは何でも、一切法は不生であると述べている者たちを害することになる。

406

もし、輪廻における真如が、一切法は不生であるという違いにより、実際に見られ、よく知られていることにより、この害は存在しないというならば、

407

導くべき対象ではない者も正しく導くべきであり、女性であるため、女性は別のものであると言うことで過失のある言葉もまた、あなたには過失のないものとなるだろう。

408

四聖諦を対象として現量によって真如を見ることが、真如を見ることにはならない。真如を見ることにならなければ、虚空の神が〔牛を殺して解脱したと〕示すようなものである。大乘の教えが示しているのは、真如であるとは認められない。

409

外界の色などの十二処が存在することにより、その現れが心に生じて、心が存在するのは正しいと心の本質が存在するのを喜ぶようなものである。

410

もし、〔あなたにとって全てが空性であるならば、〕心が存在することも認めることはできず、あなたが言う〔三界の〕有情たちは単なる心のみのものである〔と述べることもまた正しくない。もしそうならば、〕一切有情は心であり、特に理由の成立があなたには存在しない。

411

これについて以前、〔色蘊の因が生じたのは自性がないことを示すなど〕説法者の論理では、自派の〔三蔵の流儀を〕修行することに疑いを持って、〔大乘の他の教えは声聞の側の修行〕とは認めないことに耐えられず、いかなる過失について述べてもそれは道理に合ったものではない。

412

師の無分別の心は、〔独覚などの心のように四聖諦を対象としているので、法無我と人無我〕を対象としていると主張しており、主体者の我執は心ではないため、人無我を〔理解したような〕ものである。

413

加行道から生じた〔超世間の〕心は、もし対象が存在しなければ生じることはなく、止滅したならば、知るという行いも常に成立しないのでどのような心でも実体として生じるが、

414

それは〔幻や夢のように〕分別がなく、以前、悟りに至るまで認識対象としての真如を誤りなく理解するために、その自性は分別など〔の全てと〕離れた心なので、現に主張されているように〔全ては空性である。〕

415

もし、釈迦牟尼と言われる方に依存して、化身であることを否定したならば、達成すべきものを善く達成されたので、それは〔色究竟天（アカニシタ天）にとどまる報身である。〕

416

見ることがないとは〔正しい見解（正見）のことであり、〕分別がないとは〔正しい考え（正思（惟））のことであり、〕言説で語るができないとは〔正しい言葉（正語）のことであり、〕作用がないとは〔正しい行為（正業）のことであり、勝義において〕正しい暮らしがないとは〔正しい暮らし（正命）のことであり、勝義において〕正しい努力がないとは〔正しい努力（正精進）のことであり、〕同様に、喜びがないこと、あるいは、〔勝義における体験、あるいは、のちに思い起こすこと（憶念）が何もないことであり、正しい憶念（正念）と、勝義においてとどまる場所がないことを知ることであり、〕これが正しい禅定（正定）である。これらが〔八つの〕聖なる道（八正道）である。

417

この時、修行道は真如によって、仏陀の悟りを得るために、〔私がこのように受け入れて〕自らの目的を果たしたことにより、あなたの成就対象の過失でもある。〔もし瞑想するという行ないも〕考察すべきものであるというならば、

418

このように経典と矛盾することなく、比量によって随順し、（経典より、文殊師利よ、一切法は平等でないのではなく、不二ではなく、両者とも存在しないと見て、などと言われているように）このように真如に瞑想するべきであり、ここで〔事物に対する捉われを捨てるため、〕このように賢者たちは瞑想する。

419

〔このように瞑想して〕誰でも〔真如〕を理解するものは仏陀となり、〔論理に矛盾する他の経典は、〔例えば〕幼い子供をだますために母がお菓子を与えるの〕と同様である。大乘は仏陀の教えではないと言われていることも経典の論理によって確立するべきである。

420

以前に示したように、〔無常、苦、空、無我などにより〕声聞の四聖諦を対象としたこの修行道によって仏陀が悟りを得ることはなく、苦などが不生であることを理解するのみなので、例えば、独覚の乗り物により、仏陀となることはできないのと同様である。

421

〔この修行道によって認識対象に対する障りを取り除くことはできないので、もしそれができるなら、声聞・独覚も仏陀となることができると言われているように、〕比量によって害することもまた、声聞など他の流儀の中に生じる。〔世尊もまたこの修行道に依存して二つの障りを習気とともに滅した仏陀ではないからである。独覚などのようにと言われている〕例えは成立していないが、その道に入ったものたちはそれに背を向けることは難しい。

422

〔苦しみを知るべきである。また、知る必要はない、などと〕不生、滅尽を知ることは、あるがままのありようを知るように勝義の意味を知るのではなく、錯乱しているかのように分別を持っていることなので、〔不生、滅尽〕という真如を理解することは、どのように真如を理解するかではない。

423

声聞などの他の乗り物は仏陀となるための因である、と述べているのに対して返答すると、〔この修行道は、仏陀の悟りを得るための因としては正しくないが、〕どのような認識対象に対する障りがあるかということ、阿羅漢たちは究極的に涅槃に至ることを知って、〔例えば、預流（真実を直接見て聖者の流れに入った者）と同様である。

424

無知という煩悩を持つ者が〔種子を〕捨てて〔輪廻から一時的に〕解放され、〔習気とともに二つの障りを滅して〕仏陀となるようなものである。〔この時、声聞たちが捨てるものは一時的なものだけであり、〕真理でないものではないからである。

425

〔仏陀もまた、〕法身と化身という仏陀に、正しい大乘の修行道にある仏陀の悟りを成就するのではなく、〔今世と彼岸に存在すると述べているように〕分別を持ち、有相のものなので、〔例えば、来世における良き再生を示す〕世間の者たちの修行道と同様である。

426

以前より恐れを持つ者たちは、最初に縄を蛇だと間違えて、その後錯乱して間違えたことを知り、蛇だという錯乱の対策となるものを知る。〔例えば、賢い医者が毒でないものを与える方便として、毒を食べたと錯乱する病人を治癒するようなものである。〕

427

そこで、〔本当の事物のありようではないものを示し、正しくないという〕理由は不確かなものであると、答弁者の過失を述べる者をすべて滅し、〔習気とともに〕煩惱の対策とするため、これは〔大乘の仏陀の教えではないと〕答える。

428

大乘は仏陀の教えであり、無我などを示し、〔仏・法・僧という〕三宝の偉大な特徴を示したため、弟子の声聞の乗り物と同様である。

429

〔大乘の教えには私たちの三蔵の教えが多く集められているため、ヴェーダーンタ学派の見解のように、仏陀の教えではないというなど、〕反論者の量（正しい認識の根拠）によって攻撃されるため、その理由は成立しない。

このように、経蔵、アナンダに述べられたいくつかの経典、パタリに述べられた経典、他にも『苦蘊経』、地上菩薩（禅定の福德を持つ神と人）の経典、

430

431

〔声聞乗の〕根本集が完璧に揃っていないのは、集められた方法が広大でないからだと理解するべきである。正しい見解が先行し、般若波羅蜜と菩薩乗などの大乘の経典のほとんどより広大に述べられている。

432

故に、〔大乘は仏陀のお言葉ではないという〕理由が成立しない。〔声聞乗の三蔵からは、色は水泡などのようであるなどと、苦蘊の生成を否定して示しており、不生とは苦しみが存在することを認めず、〔もし因と条件から生じるのは苦蘊の自性であるならば、その自性による空をどうして受け入れないのか、受け入れるべきである。故に、空性であることを示している。〕

433

所作性（作られたもの）であるため、〔心髄のない、例えば〕幻のようなものであり、〔苦しみを離れた〕汚れのない蘊はこのようなものである。あなたは〔自性によって存在する五蘊は〕苦諦（苦しみが存在するという真理）であると主張しているが、正しい見解（正見）という心によって認められている。

434

感受作用は苦しみであり、苦しみを成立させるものである。生成などにより苦しみの本質はこのようなものであり、それは無常であるため、〔苦しみであると主張するならば、苦の〕因である集諦と道諦もまた〔無常であるため〕苦しみの本質〔に変わるものである。〕

435

〔無常は〕苦しみの因である、と言うならば、集諦〔のみが〕苦しみの本質となる。苦しみの本質は単なる言葉に過ぎないので、その意識はどうやって苦しみを知るといえるのか。〔そうであるならば、苦しみは不生であると知るからである〕

436

苦しみの対象を知るのみで、真如が苦諦であることを知るのでなく、それは感受作用が苦しみの様相に過ぎないことを知るからであり、五蘊などが苦しみであると把握する心のようなものである。

437

〔苦しみの〕因である集諦もまた、真如においては苦しみの因であるというのは正しくない。集諦の本質であるからである。〔例えば、〕剣による切り傷などが〔苦しみの原因になる〕ようなものである。あるいは、心によって生じたものなので、八正道が〔苦しみの因ではない〕のと同様である。

438

〔偽りの対象が〕苦しみの因の対象であり、その心もまた偽りであると認められているので、〔苦しみの〕因などから〔結果としての苦しみが正しく生じると言われているように、〕単

なる妄分別に過ぎないからである。〔例えば、〕苦しみの因となる〔剣などを理解する〕心を持つようなものである。

439

〔滅諦についても否定すると、まず〕不生の終わりに止滅もあるのではなく、以前に述べた通り、〔このテキストなどから生成自体がすでに〕否定されている。生成がすでに否定されているので、不生については虚空の華のように〔止滅が存在するのは〕不合理である。

440

〔それについても生成を否定する時、4種の解釈方法により、一切法は何ものも〕生じることはないので、それは不生であり、滅諦によってそれが否定されるのを認めることはできない。その際、賢者であるあなたが、〔不生が〕どうして滅諦として存在するのかを述べてみよ。

441

〔まず最初に、〕不生の終わりは止滅であるが、真実としては止滅ではない。〔最初から〕不生であるために止滅があるからである。〔例えば、〕個別に分析しないという止滅と同様である。

442

〔このように〕滅諦が自性によって存在しないなら、〔道諦もまた存在することは認められず、〕あなたが道諦によってどのように努力しても受け取るものはない。〔最初に〕不生であるならば、道諦もまたどうなるのか。〔不生である道諦を〕誰が達成し、どうやって得るというのか。

443

道諦によって悪趣から解放を得ることはなく、道諦は有為法であるから、〔来世における良き再生を得る〕という他の因である十善行のように、あるいは、〔無為法である〕滅諦を対象としているからである。これ以外の止滅も同様である。

444

〔正しい見解（正見）など〕一般的な真理を対象とする認識だから、あるいは、有為法だから、苦諦と〔集諦〕などを見てもそれは偽りであり、偽りの認識をあるがままに認めている。

445

これによって正しい考え（正思惟）と、正しい努力（正精進）と、〔正しい暮らし（正命）〕なども〔勝義においては〕偽りだからであり、道諦もまた〔勝義においては〕真実ではないことが成立している。

446

そうであるならば、〔事物に執着する声聞乗の修行道に〕瞑想することは〔大乘においては〕道理に合わない。苦しみ〔が存在するという〕真理などを見ず、あるいは、見ることなく瞑想することが正しい〔とされるから。〕見る者が見ない色〔とは、無自性という意味の自性のことである。〕これが全てにおいて、このようにとどまる。

447

悪しき心を持つ声聞たちが言う。苦諦などを見ることは認められていないので、〔大乘に従う〕あなた方が解脱を得ることはない。凡夫である子供じみた者たちのようであるというならば、

448

苦しみの本質は不生であり、それによって苦しみは不生なのである。一体誰が苦しみから解脱することを誰に望むというのか。〔苦しみのある輪廻から〕解放されるということも、幻を作り出すようなものである。凡夫たちは錯乱の力によって、そのように示されている。

449

〔同様に、〕苦しみなど誰にとっても不生であり、全くそれを見ない〔ものたちは輪廻より〕解放されることを望んでいる。故に、〔大乘の真理を見ない者たちは〕例えさえあなたには存在しないので、同様に、理由さえ成立することはない。

450

正しい見解（正見）、〔正しい考え（正思惟）などを〕まず先行させて、このように生じた修行道を大乘においても近く示すことにより、このように〔大乘の道は他にはないので〕理由は成立しない。

451

〔このように世俗の現れが生じるだけでそれに依存して、勝義において一切法を何も受け入れない〕二諦（二つの真理）に近く依存し、仏陀たちは法を説かれたのであり、それは世間における世俗諦と究極の勝義諦である。

452

ヴェーダーンタ学派にとっても、殺生、盗みなどや多くの悪語を用いる者たちにとって、善く説かれないかなる教えも全て仏陀が説かれたものである。故に〔ヴェーダーンタ学派が述べているように〕例えが成立しておらず、疑いを持って調べるべきである。

453

有辺〔という常住〕と無辺〔という断見の〕分別を離れ、智慧によって〔成立した〕行いにとどまる者たちは、因と結果は存在しないという見解が何かあっても、そのようなものを主張するのは一体誰なのか。

454

因と結果を離れた者たちは、〔言説と世俗における〕世界においてよく知られていることをあるがままに否定することがない。故に、〔中観者に対して因と結果も存在しないという〕理由もまた成立していない。

455

事物は現量による対象として〔とどまると述べていても、それは勝義においてではなく〕世俗の凡夫たちが維持するものである。それは事物のありようではないと以前にすでに述べており、現量によって害されることはない。

456

〔事物のありようについて〕賢者の流儀によって考察し、〔分析するならば、〕世間に広く知られていることにより害されることはない。このように一切法は無我であり、〔非常に微細な〕刹那について述べられている。

457

色についての真如は、凡夫たちの対象となることはなく、〔仏教哲学の微細で詳しいこと〕に関しては明知を学んでいないため、〔例えば〕自我などの空性については知らないようなものである。

458

子供じみた〔凡夫たちの〕心には正しく色などの真如を理解していないので、無明という白内障によって覆われているため、涅槃を享受する心を凡夫たちは持っていない。

459

輪廻における一切法は〔勝義において〕正しく生じていないという言葉で、特に〔考察して分析する実在論者たちは、眼などの知覚能力による〕現量で、世間によく知られていることにより、害を与える言葉によって害されることはない。

460

正しくは、一切法の自性は寂静であり、虚空に等しく、〔勝義においては〕女性もまた成立しないなら、例えによって害されることがどうしてあろうか。

461

〔と問うならば、〕行く行為、行く作用、行く人という三つのものが世俗のものとして存在するように、行く行為でないもの、行く行為として成就させるもの、これらが同様に、過失を持つと疑いを持つならば、

462

〔これに対しては、〕 広く知られていることによる害が存在することは真実ではない。何でも勝義について述べる特別なものには、それは成立しないからである。そうであるならば、〔あなたが〕 相容れない側を示すことにより、私の〔勝義の側に〕 害する力はない。

463

戯論〔という特徴〕がないので自証分は分別の汚れと離れており、多数と唯一を離れ、〔戯論を全て寂静させた本質は〕 賢者たちの明知である。

464

虚空の仏たちが示したことが真如であるとは言えないが、〔人の主である〕 梵天が最初に神から生じたと言主張し、この神に敬意を示すものたちによりこのように述べられている。

465

色などの十二処の現れは、言説による世俗の心の対象であると認められており、そこに存在するものは、言説による共通のものであり、成就対象であるというならば、私もまた認めよう。

466

〔色などの十二処は五大〕 要素から生じるなど、自らの本質である勝義において、色などの十二処が存在するのは成就対象である、と言うならば、例えもまた存在しない。答弁者の論理によって害されることもある。

467

色などの十二処が生じたのは実体と認識対象であり、〔五大〕 要素から生じた相であるから、と言われているのは成就対象ではない。自らの本質が現れ、世俗の心が生じる単なる因なので、意（心）は錯乱しているようなものである。

468

心王（主な心）と心所（心から派生した様々な機能）は、勝義における自性である。心王と心所としてよく知られた成就対象という理由と例えも存在しない。それを成就する側もヨーガ行者には常に存在しない。

469

〔三界は〕 意識のみであると言われていることも、外界に存在するものを排除するためにこの言葉の意味を捨てるべきである、と言われている。〔この言葉によって、行為者が他のものであることを否定するために、〕 私の流儀をこのように主張する。

470

〔これは経典と論理に従うものであり、何も述べているわけではないが〕 誰かの言葉によって述べているのではなく、行為をなすことはできないので、寂静なる心を〔持つものたちによるこの問答において、〕 心髄があるかないかを、賢者たちがここで考察し分析したのである。

以上が、〔ケンチェン・クンガ・ワンチュクの〕 『中観心論註』より「声聞の真如に入る」ことについての第4章である。

第5章 瑜伽行中観自立論証派の真如に入る

471

自らの〔般若波羅蜜の〕 学説に通じているというプライドを持つ他の〔アサンガとヴァスバンドゥなどの〕 人々は、甘露のような真如に〔どのように〕 入るのか、その方法を瑜伽行者たちが善く示している、と述べている。

472 〔瑜伽行派による主張の要点〕

〔主体と客体という〕 二つの事物が存在しないため、この二つが無自性としてあることは、〔勝義において〕 存在するという心の対象となると〔瑜伽行者たちは〕 主張している。

(二つの事物とは、色などの把握されるものと、眼識などの把握するもののこと)

473

〔勝義における一切法の同義語は〕無自性の事物、〔法無我と人無我、誤りのない〕真如、法が安住することであり、それを無分別の心によって把握することが勝義における真如である。

474

〔ここで、第8の意識である〕アーラヤ識が輪廻と涅槃の土台であり、すべての種子であり、すべての習気が揃ったものであり、〔第7の意識である〕マナ識(煩惱を持つ心)と言われる意識が我執であり、六つの意識があると主張されている〕ことを知るべきである。

475 〔完成された性質(円成実性)を観ること]

分別されたものを認識せず、また他に依存するもの(依他起性)を把握しない。真如を見る者たちは、完成された性質を観る。

476 〔他に依存するという性質を持つもの(依他起性)の存在]

仮設は根拠を伴うものなので、そうでなければ〔分別されたものとしての仮設と、完成された性質のもの〕二つのものが破壊されるから、また汚れが認識されるので、他に依存するという性質を持つものの存在が認められる。

〔依他起性が存在しなければ〕他には遍計所執性、円成実性の二つも存在しないことになるため、煩惱も見ることになり、依他起性は〔実体を持って〕存在すると主張する。

477 〔前主張の総括]

この般若波羅蜜の学説は、一切智を得るためのものだが、これに対して生起と消滅などの否定に専心する〔中論者の〕教えはそうではない。

478

これに対して答える。如来の全ての言葉は、我々にとって知識の根拠である。信頼される教示は正しい知識だからである。賢者たちは、如来の全ての言葉がそのまま正しい知識の根拠であることを受け入れる。

479

他の教えによって混乱させられ、顛倒している知を持つ他のものはそうではない。故に、彼らが受け入れるために理性を伴う教えが彼らによって求められねばならない。善逝の全ての言葉は我々にとっての知識の根拠であり、それらは真如を観る者たちによって説かれたものだからである。

480 〔無が存在することについて]

二つのものの無の有というのは矛盾しているから理に合わない。虚空の華の無が存在を持つことになるか、あるいはそれ(二つのものの無)の有という分別はないかである。

481

もし、真如には分別されたものはないのだから、〔完成された性質(円成実性)に〕無と有の不一致はないというならば、〔二つのものの無が存在するという完成された性質として〕特徴付けられるものと、〔二つのものの無が存在するという〕特徴の設定において不一致であることは同じなのだから、答弁にならない。

482

もし、ある者が自己の本質を捨てないこと、そのことがあるものの有であると考え、もしそれが自己の本質を捨てないのなら、それ故それは有でないのである。

483

このようにして、真如を見るものの知が、無を対象とするものになる。そしてそれ(無)は法無我ではない。無を知る心の原因だからである。

484

もし、無を対象とする知を無分別であると考え、無分別の色形の知も、真実のものにはならない。

485

もし、把握されるものとしての顕現であることにより、この色形の知は真実ではないとするならば、それ故証因は矛盾することになる。また主張命題も損なわれることになる。

486 [完成された性質を観ること]

あるいはまた、性質を対象としているのなら、教師の悟りが対象を認識するのだから、対象を持つものともなるし、無分別の知であることにもならない。

487 [唯心説の批判]

[すなわち、「この三界は心のみである。外界の対象は存在しない」という主張命題についても、] 唯心論者たちの主張命題は、承認されていることおよび、明瞭な知によって拒否されるのだから、心のみであるという認識により、色形などの知覚はないというのもまた正しくない。

488

さらにまた、夢の中で色形などの諸々の知があるように、色形などの顕現は生じるのだから、対象無くして色形などの識はあるというのは理に合わない。

489

夢などの意識は一切法を認識対象とすると考えられるので、それ故、唯心論者の主張は実例を欠いており、事物に対する損減でもあるからである。

490

もし、対象としての現れが心の対象の根拠であると考えられるなら、対象としての顕現を捨てておいて、別のいかなる心の本質があるのか。

水晶玉の例え：識には識自体としての顕現と、対象としての顕現がある。前者は自己の本性として存続するのだから、後者の対象としての顕現は他において生じたものである。例えば、水晶玉のように。

つまり、水晶玉の本性により自ら透明でありながら、青などの敷物という特別性によって青などの顕現が特徴づけられる。それと同様に、心自体としての顕現が対象の継承として転変したことにより、対象として顕現することになる。

491 [水晶玉の例えの批判]

(a) その心には二つの顕現がある。他に似ることが生じるのだから、水晶玉のようだというのは認められない。(b) なぜなら、敷物によって青などの性質として生じたものは、水晶の瞬間のものではないからである。

492

水晶としての瞬間のものが消滅した時、それが別のものとして生じることについて、「同じ水晶であると認識する知は錯乱していると考えられる。

また、(a) 識には、対象としての顕現とは別の顕現はない。(b) なぜならば、識としての能力に相違はないから。(c) たとえば、対象としての顕現という本質のように。

493 [本体としての映像の例えの批判]

「(a) 心には自己および他のものとしての顕現がある。(b) 共に働く相似したものだから。(c) 例えば映像のように。」というものは認められない。故に、二つのものとしての顕現は存在しない。

494

「(a) もし、認識手段と認識結果があるから、二つのものとしての顕現が認められる」というならば、そうでない場合もそれらは成立するので、そのような考えも認められない。

495

[バーヴァヴィヴェーカの認識論における認識手段、認識結果、認識対象について]
対象としての顕現を維持する知が生じている時、それによって認識対象は認識されるが、認識対象によってまた、対象としての顕現を維持する知が認識手段であると認められる。

496

対象としての顕現を維持する知（認識手段）が生じている時に、認識対象は知覚されるのだから、その対象としての顕現を維持する知の勝機が結果であると認められる。(b) なぜならば、色や青などは示されない性質のものに対しては、まさにそのような認識があるからである。

497

もし、(a) 外の対象は心を本質としているという証明されるべきことが意図されている場合、(b) それは識の対象であるから。(c) 例えば、無間縁となる心王と心所のように、というならば、

498

そうであるなら、諸々の心所は独立したものだから、理由は矛盾することになる。また、経典の中で唯心が語られるのは、行為主体と享受主体を否定することによる。

499

もし、識に分別された対象はないと証明するのなら、分別されていない対象は存在するのだから、対象を排斥することにはならない。

500

夢についても、無分別の知を本質とする対象があるのだから、「色などの対象を欠いているのだから」という論証因は、夢の例えが成立するとすれば、疑問の余地がある。例えが成立していないのだから、対象としての根拠を持たないということも認められない。

501 [これに対する瑜伽行派の反論]

あるいはまた、瑜伽行派は次のように言うかもしれない。知の対象は一つか、あるいは集合であろうが、道理によって考察する時、それは両者ともに道理に合わない。

502 [その道理とは何であるかと言うならば、]

その中で、一つの要素としての色は、色の知の活動対象ではない。

503

(a) 諸々の多数の要素からなる色も、心の活動対象とは認められない。(b) なぜなら、実体ではないから。(c) 例えば、二つの月のように。

504

これに対して、もし他の者（瑜伽行派）が「要素の集積でない色は心の活動対象ではないと証明するならば、それはまさに、すでに証明されていることを証明していることになる。

505

あるいはまた、「要素が集積した色について、心の対象領域出ないと証明するのなら、証因は不成立である。[色の知は] 他のいろいろな色に協力されることで、心の活動対象として顕現することが生じるのだから。

506

(a) 要素が集積した色は、対象としての根拠であると認められる。(b) それとして顕現する知の原因だから。(c) 貪欲のように。それゆえ、あなたの主張命題は、推論に基づいて否定されるのである。

507

もし、「(a) 知は対象としての根拠を持たない。(b) 自己の種子から生じるから。(c) 例えば、意の知のように。と証明されるなら、あなたにとって「意の知のように無分別であるから、知は対象としての根拠を持つことにはならない。

508

あるいはまた逆に、対象としての根拠を持たないと言う推論により、それが知であると言うことが排斥される。集積は我々の主張命題ではないから、その否定は我々を排斥するものではない。

509

〔反論〕外界の対象がないとしても、能力と対象という形象の二つからなるものが相互に原因となって、無始の時より働く。その場合、把握対象と把握する者（所取と能取）がもとよりないのだから、その両者の止滅がどうして考えられよう。

510

無分別の知は、聖なるものであるから、無分別であるから排斥されない。その分別の種子が断たれていないことにより、有分別であれ、無分別であれ、知が生じるのだからどうして解脱があろうか。

511

心の表象（想）が二つからなるものとして展開する時には、あらゆるものの顕現が生じる。二つからなる識にとって、あらゆる場合に対象として顕現することと、その識自体の生起は自己の種子に基づいている。

512

二つからなる識が、自己の本質においても、また他の〔対象の形象〕としても、根本の意識に能力を投げ入れることによって、二つからなる識の消滅がある。識という同義語によって、他ならぬ自我（アートマン）が説かれているのではないのか。

513

捉えられるものと捉えるものの二元性は幻のようなものであり、消滅するものであり、寂静でなく、無我であるが、不二の性質は不滅で、真実で、不死で、最高の境地である、と言うならば、

514

そこにおいて〔二つのもの〕の無が共通するのだから、分別が滅しているため、無分別の知によって対象を認識するものにとって、解脱は分別を持つ知と区別がない。

515

あるいはまた、唯心であることを立証するためには、心とは別なものとして、諸々の心の作用（心所）が認められてはならない。あるいはまた認めるなら、唯識性ではないことになる。

516

あるいはまた、感受などの集合に対して、「心」という仮設が認められなければならない。その通りなら、他者に随順する論者となり、自己の学説を捨てる者になるだろう。

517

もし、汚れと清浄があることに基づいて、心が実体としてあると言うならば、感受などはその通りに〔心が心の作用とは別な実体として存在しなくても〕生じるので、それは成立しているのだから、あなた方の考えは我々を否定するものではない。

518

蓮の根には多くの能力があることにより、葉の持続があるように、実体としてあるのではない心に基づいて、様々な輪廻の生存や、輪廻の相続が生じることになる。

519

対治するものに基づくなら生じることはなく、原因がある時に生じることがある。また、この場合〔実体として存在する心から、〕一切の生起などがあることを分別することは認められない。心は実体を持たないからである。

520

〔我々は〕唯心の性質を認識して解脱するのでもなく、知が滅しないようなこともない。それゆえ、世俗によっても、また真如からも、無我（アートマン）を知る者と等しいことはない。

521

(a) 色形などは空である。(b) 自性から生じたのではないから、実体ではないから、消滅するから。(c) 例えば、幻のように」と常に習うことにより、捉われることがない。

522

色形などが存在しているとしても、あるがままに理解することにより、その色形などが存在しない時には、誤った理解は何故退けられないのか。

523

二つであるとの分別が、心と心から派生する機能の活動対象であるならば、色形などが否定されたとしても、それらの分別が働かなくなることは道理に合わない。

524

もしそれを否定するために、他の手段を取るのなら、汚れて泥を洗い流すよりも、遠くで触れずにいることの方が良い。

525 [三性説批判と遍計所執性に関する批判的考察]

(a) 分別されたものは存在していない。(b) 分別されたものだから。(c) 例えば、蛇のように。というのは認められない。縄の本質により不確定だから、あるいはまた、明瞭な知がそれを否定するからである。

526

(a) 縄そのものの部分が見られるのだから、分別された性質の縄は錯乱ではない。(b) なぜなら、それは多くの部分を持つからである。また、縄の存在を否定するあなたには、事物の損傷がある。(c) あらゆる点で、対象を否定するからである。

527

(a) 外界の対象が存在していなくても、名称に基づいて対象が展開するので汚れがある、というのは正しくない。(b) 言語表現を知らない動物たちにも、煩惱は見られるからである。それらに依存して煩惱が生じることになる色形などの外界の諸対象はまさに存在すると知らなければならない。

528

色形という言語表現に関係して、色形の知が生じるのだから、色形は色形の本質を欠いているとは考え難い。

529

色形でないものの本質から区別された事物の顕現の知の活動対象が色形の本質であり、それは存在するのだから、色形は空であるというのは道理に合わない。

530

表現されるべきものが普遍であるならば、普遍は「普遍を伴った事物を離れて」存在していないのだから、表現されるべきものが本質を欠いている、というのは道理に合わない。

531

語られるべきものとは、普遍を伴った事物である。それとして顕現する知の因であるから、それはその本質として存在するのだから、表現され得ないというのは道理に合わない。

532

もし、普遍と呼ばれるものが他者の否定でないならば、普遍とは何なのかというならば、異種性を欠くことである。等しい知を生じる因であるから。同種であることにおいて共通するのだから、「普遍」として確定されている。

533

抛り所が認識されていないなら、[普遍は]認識され得ない。その抛り所が認識されている時に、[それを抛り所とする普遍の]認識があるのだから。数が認識される場合のように。それゆえ、普遍を伴う事物が分別されるものであり、語られるものでもありと認められ、[普遍はその抛り所と別な者としては認められない。

534

普遍には区別がないことから、内在すべき特定の実体を持たないことから、それぞれ一つとして、おおよび多として生じる。その特定の実体が滅びたとしても滅びないのだから、他の実体に対してその普遍の知がないのではない。

535

青でないもの（白など）および、ウッパラ（優曇華）でないものから区別された〔青でないという本質と、ウッパラでないという本質の二つの本質を持つものとして排除することはないのだから、同一の基体を持つ性質がある。ウッパラという一つの普遍が、赤や青などの様々な蓮にあり、青という一つの普遍が雲や目薬など様々なものにあるからである。二つが同一の対象に起こるからである。〕

536

(a) 他者による否定は、他者によって否定される当該のものゝの普遍ではない。(b) 他者の、他者に属する性質だからである。(c) 例えば特殊なもののように。(b) 無には特殊なものがないから、のど袋などには知の区別がないからである。

537

あなた方は事物が認識されていない時に、他者の否定という普遍の認識があると主張するのだから、他者の否定という普遍が分別されるものであるということと、語られるものであるということは認められない。それによって、他者の否定以外のものが語られるものであるならば、他者の否定が語られるものであることは損なわれる。

538

それゆえ、他のものから区別された本質を持つ事物が表現されないというのは道理に合わない。ゆえに、瑜伽行派の説は不合理である。

539

表現の本質を欠いているから、〔般若経典が述べているように〕諸事物は無自性である。さらにまた、その「表現の本質としては、」諸事物は不生であるため、生じていることも滅していることもない。

540

表現を伴う実在は語られる通りにあるのではない。故に、諸法は〔表現通りの実在性を持たない、などと経典に多く述べられている。〕

541

依他起性は存在すると語る場合、世俗によってであるなら、すでに証明されていることをさらに証明することになる。もし真実からであるとするならば、例えはなく、理由もまた矛盾していることになる。

542

依他起性は生無自性である。存在している自分自身からは生じないからである。〔幻のように〕というならば、我々と同様に、生起と消滅の否定を確証するものではないのか。

543

何故なら、諸縁によって生じたものは、生じてはいないと苦行者である牟尼は述べられた。勝義においては、自性に基づいてそれが生じることは否定されているからである。

544

また、諸法は真如ではないから、それら諸法の自己の特徴・共通の特徴（自相・共相）を活動対象とする多様な知と言葉の働きは、世俗的には矛盾しないのである。

545

実際に、あれこれの名詞によって、あれこれの法が言語表現される。その名においてそれは存在していない。そしてこれが、諸法の法性である。

546

あるいはまた、もし、「縁によって生じた性質なのだから、〔このバーヴァサムクラティースートラは我々が〕承認していることを論証する。〔諸法の生起は依他起性によるのだから〕というならば、諸法の生起は幻のように、真実でないのではないか。

547

(a) 依他起性も認識されたと考えられる。(b) 自性を持って生じるのではないから。どうしてかというならば、(c) 勝義によって生じたものが、誤って顕現するのは道理に合わないからである。

548

もし顕現する通りに、それらとして顕現する本質を持って存在するのなら、顕現する通りに存在するのだから諸法はどうして幻に等しいと言えるのか。

549

実有の本質を持って生じないのだから、不生であり不滅である。知覚されるものは実体として存在していないのだから、実在性を持たず無自性なのである。

550

仮設には過失を犯していることはない。唯識であることは等しいのだから。断たれるべきものと、断つものが実有なのだから。遠離などが誰にあると認められるのか。

551

なぜなら、実体がないとしても、妄分別を停止することにより、その解脱はある。実体があるとしても不生なのだから、〔同様に分別を停止することにより、その解脱はある。〕これ以外に〔解脱に関する〕想定は認められない。

552

実在するものがないならば、仮設も実有でないことになる。瑜伽行派が無を見るものであり、語りかけられるべきでなく、ともに同じ僧伽に住むべきでもない。

553

彼は自ら墮落するものであり、他の人を破滅させるものである。このように憎悪の肉を吐き出すのは不消化な増上慢を示すものである。

554

(a) 諸法は幻に等しいと言われている。(b) 本質が(実有でないから、また、愚か者を惑わす因であるから、あるいはまた、以前に存在しなかったが〔その後存在するからである。〕)

555 〔あなたの方の真実は無空に等しいから無分別であるともまた、理に合わない。どうしてかというならば、

556

生じたものが表現されないということはある得ない。否定は先に示したからである。表現されないのだとしても、〔表現されないという〕世俗に対して真実であるという混乱がある。

557

真実の中に他の真実は実在しない。それにもかかわらず真実の知見が認められるなら、水瓶の中にも他の水瓶は存在しないのだから、どうして真実の知見が認められないのか。

558

あなたにとっては、学説の欠陥を隠すために語られたものであるが、法界が汚れたものと清浄なものになることはあり得ない。金などは縁(条件)に従うのだから、法界の例えにはならない。

559

虚空は常に清浄であるが、目が清浄であることと不浄であることにより、有垢と無垢の虚空が現れるように、諸法の法性はそれと同様である。

560

諸法の法性、法界に対する汚れなどの知の迷乱は、行為主体の性質なのであって、行為対象の性質ではない。それを対象とする知は清浄でなく、真実が認識対象であるというのは認められない。

561

真実が実体として存在する時は、前と同様に過失が発生する。また、出世間の無分別であるその真実を対象とする知は認められない。消滅するからである。

562

知が、知るべきものに従う限り、眼病(白内障)を持つものである。それによっていかなる過失が生じるのかと言うならば、知は知る限り、知るべきものに従うべきである。

563

(a) 一切智性が一時的であるということはありません。(b) 智が自分自身に働くというのではありませんからである。(c) たとえば刀の刃のように。また、自己認識は否定されるからである。

564

無分別で聖なる知の認識対象は、あらゆる点で言語表現されることがない。先のように、生起は否定されるからであり、生じていないものには実体がないからである。

565

有と無を性質とする自性は勝義のものである。あなた方にとって、付託（頼んで任せること）と損滅の極端からの解放がどうしてありえるだろうか。

566

私が考える通り、有ではない。真如において事物は生じないのだから。有がないのだから、無ではない。真如は有と無の両者を離れていることと認められている。それゆえ不二である。

567

(a) 仏陀が認識対象を持たないことにはならない。(b) 真如を認識対象とするのだから。さらにまた、(b) 平等な悟りであることにはならない。真実と顕現が区別されるからである。

568

そもそも、そこにそのような潜在力が置かれておらず、真如を認識する知というのがどこにあると言うのか。例えば、虚空の華として顕現する知が、〔虚空の華を見る〕潜在力を置かれていないということ自体道理に合わない。

569

自己の教理を隠蔽するのだから、あなた方にとっての真如は同一性と別異性から解放されていない。実体ではなく、認識されるべきものでないから、我々にとっては語られた通りにその真如は道理にかなう。

570

さらにまた、虚空にも等しい。不生なるがゆえに、区別がないからであり、また分別に汚されないからである。また、全く言語表現されないものでもある。いかなる場合にも、知によって捉えられないからである。

571

生起という眼の病を離れた知が出世間であると認められている。世間から救うという目的のために、あるいはまた、世間を完全に超えることからである。

572

出世間の知は無分別であり、認識対象を持たず、特徴も持たない。対象に対して特徴をとらえないからである。それによって自己と他者の性格を同時に持ち、覚知を持たないありようでも平等に覚知するものである。

573

諸法の不生は、法無我であると言われる。そこにおいて、分別とは汚れであり、特定の顕現である。そのしるしがありえないことは、前の〔第3章で述べたこと〕同様である。

574

〔真如は、〕思い、語ることによって理解されないの、その理解は推論によらない。それゆえ、諸法の法性は思いと弁舌によっては理解されないと〔他のものたちが考えるなら、〕

575

ここにおいて、教説に従う過失のない推論によって分別された、余すところのない種々の分別の奔流を除いたのち、

576

虚空に等しい心を持つ諸仏は、すべての知の対象の本質を無分別の知によって見ることなく見るのである。

577

それゆえ、真如が推論の対象であるというのは成立しない。真如の智と反対の主張は、推論によって斥けられる。

578

異なる教えとの区別により区別された諸々の知においては、〔どんな方法があるだろうか。〕また教えの区別がないときも、考察に耐えうるいかなる他の方法があるだろうか。

579

反対の主張が排斥されない主張命題のみのものは、認めることはできない。反対の主張が否定されない時、どうして無分別の知があるというのか。

580

それゆえ、真如を見る聖者（牟尼）によって二つの真理（二諦）が説かれた。なぜならば、言語表現に依存して、真如の対象となる理解があるからである。

581

(a) 〔瑜伽行派の言う〕真如を対象とする知も、認識対象を伴っているのだから虚妄である。(c) 夢などの知のように。それゆえ、真如を対象とする知によって捉えられるものが真実であると言うのは道理に合わない。

582

捉えられず、言語表現がされず、知の働きを離れた法が、牟尼によって説かれた。その法は、〔瑜伽行派が主張する通りなら、〕否定されることになる。

583

それゆえ、理解と教説を伴った、先に説明した真如は、論理によって考察されても、それは損なわれることなく確立している。〔瑜伽行派が考察した真如とは、詳細に考察すると考察に耐えないものである。〕

584

ある者は蘊の樹木に執着し、ある者は〔瑜伽行の〕識の網にとらわれる。勝利者の息子は、正しく〔有と無の〕極端な崖に陥ることなく、勝利者の息子たちは〔中観を享受して〕遊戯する。

585

一切法の認識対象が常に成立しないため、どのような現象であっても無分別の心〔の自性〕も生成を持つものにはならない。真如は比類なき師が真如を悟られたことにより説かれたものである。

このように、〔第3章 真如の智慧の探求〕において、教えと理解を持って私が述べた主張は、自他の論理学派たちの推論によっても揺るがず、正しく確立している。

以上が、〔ケンチェン・クンガ・ワンチュクの〕『中観心論註』より「瑜伽行中観自立論証派の真如に入る」ことについての第5章である。

第6章 サーンキヤ学派の真如に入る

586 〔根本物質について〕

〔ここでサーンキヤ学派の真如について説明する。世界の根源としての物質的〕自性である〔根本物質（プラクリティ）〕は無分別で、〔常住で、不生で、主体者であり、全てに遍在する三つの特性を持ち、生み出す本質を持つ。これに相對するものが〔純粹な精神原理である〕真我（プルシャ）であり、常にこれらを習熟しなければならない。〕

587

〔根本の自性である〕根本物質は変化することなく、〔心、あるいは〕大、〔自我意識、五微細元素〕という七つの相を持つ。自性〔あるいは因〕が変化したのが結果となる七つの相である。

大（マハット）とは、自性から展開する知の働きの根源状態のことで、これから自我意識や我執が展開される。

変化するものは〔結果となる〕16の相を持つものであり、〔五大要素と十一の知覚能力である。〕〔真我（プルシャ）とは〕自性ではなく、〔他のものを生み出すことがないからである。〕変化するものではなく、〔それ自体不生だからである。〕真我（プルシャ）は意より喜悅を生むものである。プルシャの映像を生み出すものであり、〔意によって意味を理解して〕映像をプルシャに生み出すものである。

根本物質が持つ三つの特質：サットヴァ（喜悅、満足、純質）

ラジャス（原子、憂・激質）・タマス（闇・ムンパ、影質）

588

同様に、〔水面に映った不動な映像のように、〕完全に変容した様相が現れると、心が対象に入ってそれに追従する。〔プルシャは〕自我と他者の〔根本となるものであり〕その自性は他のものである。このように真如のありようを見たことにより、作用と行為〔のすべてが〕退くのでプルシャは束縛から解放される〔とサーンキヤ学派のある者は〕述べている。

589

私も、私のものも存在しないと知ることにより、〔真如を悟ってそれを維持し、〕自性によってプルシャは解放されるので、それが真如であるとサーンキヤ学派のある者は述べている。

590 〔仏教徒たちによる論破〕

ここで、真我（プルシャ）と根本物質（プラクリティ）がどのように不合理であるかはすでに示し終えているので、それをここでも繰り返し考察するべきである。自我は真如を知る者ではない。

591

ここで、知るべき認識対象を知ることにより知（覚知）に従事するならば、認識対象〔の一切には生成が〕存在しないため、知もまた存在しない。以前覚知を得た者たちは、まだ悟っていないことを新たに悟ることはなく、ここで、真我（プルシャ）はどうなるのか。

592

〔たとえば、火で薪を〕まだ燃やしていない時、〔まだ燃やしていない〕木炭が燃えていると言うのは不合理であり、燃やすという行いがされていないからである。以前の場合と同様である。では、〔火で薪を燃やして木炭になっても、火は退くことなく〕燃え続ける。この例えのように、〔真我が行為と作用から退いたあとも、〕知の本質が成立することはない。

593

〔輪廻においても〕認識対象の現れを維持することにより、〔認識対象を〕知ることを覚知と呼ぶことを認めるが、事物は知るといふ働きに依存しているため、〔認識対象である事物を知ること〕また真我（プルシャ）に依存している。それを考察するならば、真我は変化しないことを〔受け入れて、〕自己の対象に入ることはこの流儀に矛盾するものである。

594

意識と覚知は別異ではないため、〔この二つを〕どうやって別異のものと考察するというのか。〔対論者が言う。〕(a) 覚知は心ではない。(b) 因を持つからであり、(c) 水瓶と同様である。では、〔まだ生じていない〕覚知は、因を持つ意識ではない。もしあなたが、心についてそのように考えるならば、

595

〔仏教徒が答える。〕真我の本質である覚知は、認識作用とは別異である。なぜなら因がないから。実例がないので、別異であることは成立しない。もし認識作用において知は存在しないと言うならば、あなた方サーンキヤ学派の定説と矛盾する。なぜなら、真我に知がないと言う誤りが付随し、真我の知は認識作用を必要としないことになるからである。

596

〔まず、〕 (a) 不生は覚知ではない。(b) 不生だから、というなら、それは道理に合わない。心が従事する際の違いは、意識が対象に入ると主張しても、別異のものとその違いを持つものとなり、別異のものは存在しないので、その違いもまた存在しない。

597

〔サーンキヤ学派が〕 もし、私の心が〔従事する〕 どのようなものであっても、ある人々はあるがままにそれに従事することを認める、というならば、ある人々はそれと反対のものに心が従事する。例えば、案山子を案山子だと知る心が生じるのは、人だという錯乱の心が生じるのと同様である。

598

〔仏教徒が言う。〕 またある人々が、あるがままに認めるというならば、〔我々も〕 世俗において成立するものを成立させる。〔世俗において〕 あるがままの心の対象に「私」という名前を与え、我々と主張しているが、もし〔あなたが〕 遍在と〔常住と唯一〕 などの相を持つものの心を認めるならば、それが真如であり、世俗においても成立する実例は存在しない。

599

〔もしサーンキヤ学派が、〕 あらゆるところに遍在することを特別な相とする覚知が、あるがままの覚知であるというならば、〔仏教徒が言う。〕 厳密な意味でも、習慣的なものでも、実例は存在しない。

600

〔サーンキヤ学派の反論。根本物質と真我を別個に見るとき、解脱があるという主張に対しても、〕 無知によって知があるのか。あるいは、根本物質は無知ではないのか。何によって真如を知る智慧が生じて、誰が解脱するというのか。

601

〔仏教徒が答える。〕 自性には分別がないため、分別によって維持するならば、自我とはこのようなものであるということにより、分別はないので他者のものであることは不合理である。〔他者による分別〕 がなくても、輪廻においてこの真我が退くことはなく、〔真我は〕 多数であり、共通のものだからである。例えば、たくさんの主人の中から一人が死んでも、〔他者の集まりの中から誰かが〕 奴隷になるようなものである。

602

〔サーンキヤ学派の主張では、〕 別異である音などの対象に覆われることがないので、〔神など有情の体のそれぞれに遍在する〕 自我の区別より、〔体を持つ一つの〕 真我の意に喜悅（満足、純質）など特に優れた真如を見て〔一切有情を〕 解放するという主張は不合理である。

603

〔対象としての〕 音などの覚知と、同様に、法と法でないものを享受する過失は同等なので、〔真如〕 を見ない〔という束縛と、真如を見ることで解脱を得ることも不確かとなる。〕

604

もし、真我に心が入った後でそれをなすというならば、真我に分別はないので〔ミルクのようなものである。〕 真我には因がなく、全てに遍在しているのではないので、真我は変化するため、ミルクが腐ってヨーグルトになるようなものである。

605

真我が変化しなくても、影像の因であるため、上の過失を伴って生起する。例えば、水に映った影像のように。

606

真我には分別がないので、自分と他者という観念は不合理である。〔もし真我に分別がなくても、あるかのように考察すれば過失はない、というならば、解放を望むことも考察のみのものになってしまう。〕

607

〔その答えとして、サーンキヤ学派が言う。〕 (a) 三つの特質を持つ自性である根本物質（プラクリティ）は存在する。(b) 〔苦楽と平等心など〕 様々なものに従うからであり、完全に変容して、〔大などの行為なども順次〕 なされるからである。〔大と自我意識などは〕 作用と行為の自性であるため、〔種から芽が出るなどの〕 能力が存在するからであり、様々な自性があるためである。

608

上に述べた通り、例えば破壊された土器の破片の塊などとも〔土の塊であるのと〕 同様に、〔根本物質が明らかにしない唯一には〕 区別がある。それは、〔大、自我意識（我執）、5つの微細な元素、11の知覚能力、五大要素であり、〕 その区別の因である〔唯一の根本物質〕 とともに成立していると言うならば、〔我々にとっても一切の事物は因と条件から生じることがすでに成立しているの、あなた方にとってもそれが〕 成立する。

609

〔もしサーンキヤ学派が、〕 諸々の区別の相が因とともにあることが証明される、と言うならば、〔仏教徒が言う。〕 それはすでに証明済みのことを証明することになる。あらゆるところに遍在するという事は成立しない。何故なら、その理由が成立しないから。

610

〔サーンキヤ学派が言う。〕 「それは共通の相に基づく」と主張する。何故なら、共通の相を持っているから」と言うならば、〔仏教徒が言う。〕 共通の相こそ特別であるならば、前と同様、事例も存在しないことになる。

611

〔サーンキヤ学派が言う。〕 楽などを性質とする蘊であるため、受蘊と同様である、と言う理由は確定ではない。何故かと言うと、感受は（楽・苦・痴）を自性とするからであり、受蘊と同様であると言うならば、それは認められない。蘊（集まり）であるから。楽〔の蘊であり、〕 苦の蘊であるなど、個別に不確定なものとなるからである。

612

〔仏教徒が言う。〕 不確定であることにより〔主張命題の成立を〕 捨てるなら、機能を果たす自我の本質であるため、また、因を持つものであるため、随順するものがあるなど、比量（推論による正しい認識の根拠）という理由とともに〔すでに示した通り〕 過失によって害されることになる。

613

〔根本物質は〕 不生であり、無限であるなどと述べることにより、〔根本物質の〕 特徴を捨てるなら、根本物質の特質を主張することにより、理由が不確定のものとなる。

614

同様に、〔一つの根本物質から大などの全てが生じるという主張や、大から我執など個別の別異の因からも生じるという主張からも、因が常住で唯一であるという〕 事例が存在するわけではないが、白檀が破片になっても〔香などを体験することなく〕 知ることができるのであり、〔薬などの〕 力や〔色が白いことなどの〕 色（物質的存在）や、〔一つの幹に多くの小さな枝があることなどの〕 量（正しい認識の根拠）などにとどまって、〔白檀の〕 本質にとどまるようなものである。〔というならば、〕

615

〔仏教徒の論駁。〕 この点について答えると、〔根本物質の〕 力という本質が存在するならば、前のような事例は成立しない。もし、明らかな本質としての根本物質が存在すると主張したとしても、〔根本物質が明らかにされない主張の〕 成立は捨てられることになる。

616

〔白檀とその破片のように〕 行為と作用が一つの本質として成立しても、〔麦の種子から麦の芽が生じるように〕 すでに述べた通りである。

617

〔因と結果〕の種類が同じ種類のものであり、〔前と後の〕同じものに対して同じものが成立していても、前に成立し終えたものは成立しているのであり、それ以外の他の意味を知ることを主張しても、以前のように全ての過失が生じることになる。

618

楽・苦などの全ての理由命題は、不確定である。あるいは、時間は分離できないため、別異でないとするなら、一般に認められていることや聖典と矛盾する。

619

〔もしサーンキヤ学派が、〕白檀の性質が現れないからといって、無であると証明できるわけではない。何故なら、時間と第6格によって説くからである。今の瞬間のように、と言うならば、

620 〔仏教徒の論破〕

そうであっても、〔あなたの心は〕喜んで自派の過失を全て隠し、〔私たちがすでに〕述べたすべての過失がないのではない。〔これを以前の例えに結びつけると、ガトートカチャという人の話と〕同様であり、この人のように焦りがあるから、自説の過失を隠しても、上述の過失がないわけではない。ガトートカチャのように。

621

〔ガトートカチャの体が様々な形に変化したように、〕それと同じ形だと言うならば、理由命題の意味を選ぶことは不確定である。別異でない体であっても、理由命題は不確定であるから。

622

もし、「耳などは行為を受けるものである。何故なら知がないから」と主張した場合、諸々の特殊な相が説かれずに、行為を受けるとするならば、すでに証明済のことを証明することになる。

623

もし、活動がないというような特別な相を持つものならば、同じ性質とは何であるのか。知として真実であっても、意志的な努力がないので行為者であるとは主張しない。

624

〔仏教徒が答える。〕 (a) 事物は行為を離れていると認められる。(b) 何故ならば、認識対象であるから。(c) 認識対象であるものには行為はない。(d) 知もこれと同様である。楽と痴のように。〔もしサーンキヤ学派が〕苦も動く性質によるのだから、不確定に違いないと言うならば、

625

〔仏教徒が答える。〕苦もまた行為がないものであると知るべきである。何故なら、1) 連続性を持つから。2) 知がないから、3) 言語で表現されるから、4) 認識の対象であるから、無痴のように。

626

同じ性質の理由命題は各々別に主張されているので、根本物質（プラクリティ）の特質においてこれらは不確定ではないというのが真理である。あるいはまた、次のような大きな過失が生起する。

627

作られるものと作るものが同種であることが認められるから、因と結びついていると推論される。理由命題も特別性を持つので、このような矛盾に至る。

628

それが把握されない以上、把握されることはないので、色形などは別異ではない。その性質のように。個別の事物であるから、別異でもない。何故ならそれは、知られるものと知るものであるから。

629

故に、現れないというわけではないので、作られるものは存在するかしないかである、と主張する。

（破片を生じるので、現れていないこともない。白檀の幹の自性を離れているから、作者であって、それを見る者ではない。〔サーンキヤ学派が言う。〕実例がないから、というならば、〔仏教徒が答える。〕現在の瞬間も、実体として存在することは認められていない。

〔と答えると、〕現在の瞬間が実体として存在する、と誰かによって認められているとしても、中観派の人々は、これが実体として存在するとは認めない。何故なら、瞬間は、最初の時と、中間の時と、最後の時とは全く別異のものだからである。故に、集合を蘊（集まり）とするから、実体として存在しない。

630

もし、次の点について、これは行為者の行為を受けるものである。行為を受けるものであるから、〔例えば、享受者は〕床のようなものである。知者は行為者である。とこのように〔サーンキヤ学派によって問われた場合、仏教徒は、〕次のように答える。「これを認めることはできない。」何故かというならば、集積を本質とする行為者が、臥具や座具を必要とするのと同様である。知もまた集積を性質とすると認められているので、有法を限定する者とは正反対のことが成立し、矛盾が生じる。

631

〔覚知とは何かと問うならば、〕覚知とは認識対象を確実に理解することであり、それは何なのかを述べてみよ。それは事物の条件となる実体に依存しており、例えば、衣服などを染料で染めるのと同様である。

632

さらにまた、音声などを認識するようにはならないのに、どうして認識作用なのか。あるいは、音声などを認識するようになるならば、どうして知は認識作用なのか。

633

作用のないものは生起しないから、主体者の本質をなぜ主張するのか。生起しないものに仮説する場合も、真我にも仮説することになる。仮説をしても行為者は生起しないから、兎の角のように、不合理なものとなる。何故なら生起しないからである。

634

行為者という言葉が述べられているのだから、〔盗賊が火を焚き、火で町を焼いたなら、盗賊が町を焼いたと述べるのと同様であり、この〕火の如く、あなたのいう真我もまた、因を持ち、果を持ち、あるいは行為を受け、行為をさせることもある。

635

さらにまた、遍在することはない。自性（プラクリティ）以外の他のものでもなく、真我でもなく、真我自体の特別な法はこのように捨てられることになる。

636

これによって、あなたが受け入れた〔主張は〕ここで否定されたため、〔あなたの〕主張命題には過失がないのではない。自在天は因であると説く者たちは、唯一、恒常、不生である自在天がすべての世界の因であると説いているが、それは石女の息子のように存在しないものなので、ここで知などは捨てられた。

637

〔またある人が、〕私と私のものでないものという分別は、心に伴う知であるという見解は誤っているので、束縛から解脱するのはあなたの真我であるというの是不合理である。

638

〔享受対象となる主体者の根本物質〕と真我を別異であると見ることによって解脱を得ることはできない。享受する心は別異だからである。享受対象となる〔女性〕や享受者の真我の二者は別異であると見るのと同様である。

639

たとえば、妄想を持つが故に、男は女と別異であると見るのと同様に、真我は根本物質と別異であると見ることにより、〔輪廻からの〕解脱があるとは主張していない。

640

このように、サーンキヤ学派の学説は、前と後の言葉が矛盾しており、知性による論理をもたないのだから〔これを受け入れることはできず、〕賢者たちの心は諸々の善き知に入ることはない。

641

麦の種子の中にある麦がとどまる場所と、男女の結合において子供がとどまることと、太鼓の中にある音声と、

642

食物の中にある外界の地などの要素と、樹木の中に火が燃えていることなどは見ることはできないため、直接知覚を捨てるものであり、これをどうして真理というのか。

643

それらは存在しているが、明らかではないため、その行いを実際に明らかにすることはなく、と言うならば、明らかでないとは存在しないことではない。エマホー、〔あなたの〕論書は非常に素晴らしい、と述べられている。

以上が、〔ケンチェン・クンガ・ワンチュク〕の『中観心論註』より「サーンキヤ学派の真如に入る」ことについての第6章である。

第7章 ヴァイシェーシカ学派（勝論）の真如に入る

カナダ仙人を開祖とする実在論を唱えるバラモン教の一学派。

六句義：一切の認識対象を6つのカテゴリーとして立てるのが特徴。

実体、性質、運動、普遍、特殊、内属の6つ。

実体はさらに、地、水、火、風、空、時、方角、アートマン（自我）、意（マナス）の九属性に分けられる。

644-1〔ヴァイシェーシカ学派の学説について〕

自我の属性（グナ）には9つある。心、〔楽、苦、願い、怒り、努力、法でないもの、意識、有為〕である。〔これらの法と非法（仏法に反するもの）の働きを〕放棄する瑜伽行者は、〔自らの〕意（心）を自我と呼び、無分別に住することがヴァイシェーシカ学派の解脱である、と述べている。

645-2

広く先に示した次第によって、真実でないという理由が生じることをすでに否定したので、あるいは、事物を完全に否定し終えたので、欲望と怒りなどの一切の属性は存在しない。

〔対論者が、「前に示した次第とはどんなものなのか」と問うならば、答えて言う。〕

646-3

〔虚空の華が蜂蜜の因として正しくないように、〕（a）不生は行為者ではない。（b）なぜならば、確実に行為を成すためには行為者が存在しなければならないからである。（c）例えば、蜂蜜の因が虚空の華ではないように。

647-4

不生は生じたものではない。虚空の華が不生であるように。

生起の自性などがあったところで、勝義においては存在しない。

648-5

(a) 常住の自我は〔知覚能力、対象、意が出会ったことから生じる〕意識に依存しない。
(b) なぜならば、因を持つからである。(c) 例えば、水瓶のように。(a) 心はアートマンの属性ではない。(c) 例えば、アートマンの属性として生起を持つからである。

649-6

そうであるならば、(a)〔覚知はアートマンに〕内属する。〔というならば、〕無我であるため、内属しないのは正しい。無常だからである。このように、楽と苦なども究極的には否定されると知るべきである。

650-7

(a) 意(心)は常住ではないと認められる。(b) 何故ならば、言葉で表現されるものだからである。(c) 例えば、水瓶のように。(a) 意はアートマンの働きではない。(b) 何故ならば、事物だからである。(c) 例えば、楽のように。

651-8

アートマンの存在はすでに否定されたが、ここでもう一度考察される。縁って生じたものではないから、アートマンが存在しないことは、虚空の華が存在しないようなものである。

652-9

それが有るという普遍性が存在することをもう一度仮に認めた上で、次にそれが考察されなくてはならない。

(a) それは遍在ではなく、常住でもない。(b) なぜならば、認識対象だからである。(c) 例えば水瓶のように。

653-10

〔もし、対論者が、〕「覚知(心)〔が生じれば〕転変を持つ」と言うならば、あなた方のいうアートマンは衰退してしまう。また、覚知(心)が生じれば、変異しない認識というものはない。認識があることと認識がないこととはどうして相応することなどあろうか。

(反論者がもし、(a) アートマンと覚知の内属関係は存在する。(b) アートマンは覚知を持つから。(c) たとえば、杖と、杖を持つ者の関係のように。というならば、)

654-11

内属関係は否定されるのだから、実際にそれとの結合関係も不合理となる。

(反論者が「なぜか」と問うならば、アートマンは常住、覚知は無常なので、永遠なるものと無常なるものには内属関係がないからである。例えば、暑さと寒さのように、無関係である)

楽と苦、意思的活動と欲求、嫌悪などにもまた、このような道理がある。〔対論者が、「なぜか」と問うならば、〕

655-12

(a) 楽は、常住のアートマンに依存することはない。(b) なぜなら、因を持つから。(c) 例えば、水瓶のように。(a) または、アートマンの属性は楽であると認められない。

656-13

(b) なぜならば、楽は生起を持つからである。(c) 例えば色などが、その属性として認められないように、また、(a) アートマンにはそれらの内属関係があるとは認められない。

〔この論証は、苦などにも適用される。〕

657-14

また、アートマンと同時に存在すると言われる、不変で有性としての大と関係する時、アートマンが有るか無いかは〔どちらも〕不合理である。

(大(マハット)と覚(ブッディ)は覚知の働きの根源状態のこと)

有るとしても、大との結合は無意味であるが、無いとしても、それには意味がない。

(もし反論者が、アートマンが存在するものならば、大〔有性〕によって顕現されるが、存在の状態は生起するものではない、というならば、)

658-15

顕現するのは他のものがあるからである。他のものがなければ、それがどうして顕現されようか。数などとの関係もまた同じことである。他のものもそれによって回答される。

659-16

もし、普遍などとの関係によって「プルシャ（真我）は普遍であってひとつである」と認められる時、それらの条件を得てのみ、プルシャに関する様々な観念が生じると認められる。では、〔解脱した時には、プルシャは、〕

660-17

有ではなく、無ではなく、多ではなく、一ではなく、微塵ではなく、大ではなく、常住ではなく、無常ではない。他のものではなく、他でないものではない。

661-18

アートマンと同様に、他の原理もこのように空である。努力してすでに説いた場合に、カナダ仙人の弟子たちによってもまた、それが明らかにされるからである。

（反論者がもし、「確定説は一つなのだから、ヴァーシェーシカ学派の説を承認する。すなわち、それが真理の知見であると一般に認められる、というならば、」）

662-19

これらの特徴を把握するから、原理性と知見は相応することがない。つまり、特徴が非原理を生じる性質であることを観察する時、それは原理でないことが認められる。

663-20

(a) アートマンより区別される対象（普遍）とアートマンとの関係は認められない。(b) なぜならば、有の知覚だからである。(c) たとえば、覚知の普遍について、普遍と称するものを認めるように。

664-21

数などとの関係もまた同様である。アートマン、あるいは他のそれぞれのものについて、賢者によって道理の通りに、このような覚知はない、と認められる。

665-22

(a) 覚知（観念）と苦と楽などの属性は、アートマンと離れることはない。(b) 属性だからである。(c) 例えば、数のように。故に属性がなければ、アートマンは存在しない。

（覚知、楽、苦、欲求、嫌悪、意志的活動、非法、法、認識、潜在印象（行）、というアートマンの一切の属性というのが有法である。）

666-23

方位とそれ自体（方位の部分を持つもの）と離れないもの（意）は、またどんな人でも、たとえ自己のアートマンでなくても、アートマンと結びつくことが認められるから、記憶によって全ての認識を生じる。

667-24

一定の不可見力（運命力）の決定は、また前のように過失に陥る。すでに提示されたことがもう一度ここにある。無であるものの生起は否定されるから、それと結合することは認められない。

（不可見力の決定とは：確実に法を修習し、非法を捨てて離れることであり、それは方位の部分がないアートマンとは相応しない。）

668-25

(a) アートマンは存在しない。(b) 所縁（認識作用の対象）とならないからである。(a) 意もまた存在しない。不生だからである。存在しないアートマンと意には、どうして基体と依存するものとの関係があろうか。

669-26

実体などの知見があって、分別などの能動因（他からの働きかけなしに自ら活動する因）を持つから、（6つの原理を見ることを願う聖者の）ウルーカが解脱を求めないように、同様にウルーカの弟子たちも解脱を求めない。

670-27

(a) 地などの真理を生む観念は、まだ解脱しない時にカナダによって認められている。
(b) 何故ならば、諸々の区別は把握されないからである。(c) たとえば、靈魂の原理の観念のように。

671-28

ヴァイシェーシカ学派の真実においては、悪い見解という眼病を生じて、それによって道理を離れるから、認識は歓喜を生じない。

以上が、〔ケンチェン・クンガ・ワンチュクの〕『中観心論註』より「ヴァイシェーシカ学派の真如に入る」ことについての第7章である。

第8章 ヴェーダーンタ論者の真如に入る

1) ヴェーダーンタ論者の主張について

672-1

〔ヴェーダーンタとは、〕知の究極に至ることである。つまり、執着なしに確かに知ることであり、これを語る人、あるいはこの言葉を発する人は、ヴェーダーンタ論者である。

〔彼らは次のように語る。〕ヴェーダーンタの学説とは異なる非仏教徒の教法によれば、アートマンの知は極めて得難いものである。アートマンを否定する仏教徒にも、解脱などどこにあるというのか。

彼らは「一切の有為法は空である」と述べて、有為法は空であり、自性がなく、刹那ごとに滅すると説いているが、アートマンの存在を認めないならば、束縛され、解脱することなどないことになってしまう。しかし、常住なるアートマンの自性は束縛と解脱の両方にとって正しいと言うならば、ヴェーダの中に広く説かれているプルシャ（真我）が〔讃えられるべきである。〕

673-2

闇とは別異のプルシャは大（マハット：知の働きの根源状態）となり、太陽の光のように〔讃えるに値する〕大自在天の本質である。このアートマンを賢者が知るならば、不死〔の境地を得ること〕になるだろう。

674-3

そのプルシャを、万有の創造者、自在天にして黄金色なり、と観じる者は、罪や障りと福德を超越して、最上なる寂靜を得るだろう。

〔もし対論者が、このプルシャは三界を超越するものなのにどうして万有の創造者であるのか。それは、この三界より離れて遥か遠くに住する者なのに、それが一体何者を支配する自在天なのか。と言うならば、そのプルシャは遠くに住する者ではあるが、万物に住する者でもある。これについて、〕

675-4

〔それは全てに遍在するものなので、〕すでに生じたものと、今生じつつあるものと、これから生じるものと、一切は大自在天のプルシャであると主張する。それは、外と内と、遠くと近くと、それより作られたものとなる。

〔もし反論者が、「プルシャは唯一のものなのに、これほど多くの働きの中に入ってしかも尽きないものなのはどうしてか」と問うならば、たとえによって次に証明する。〕

676-5

様々な生存（有）は、プルシャから生じる。例えば蚕の糸のように。

〔まるで絹を生み出す蚕が多量の絹糸を作り出しても、それ自体は変化することなく、また尽きることもないように、プルシャは三界において現実に生存を生み出しているが、それ自体は変化することなく尽きることもないのである。〕

賢者はプルシャの部分の中に溶け込んで、再びのちの生存を受けない。

〔また、瑜伽行者がプルシャを観じないならば、不死の甘露を獲得しないのは何故なのか、この理由を説いて言う。〕

677- 6

(a) 死を得る者たちは不死の甘露を得ることはない。(b) あたかも火に冷性が存在しないように。故に、プルシャそのものは不死である。叡智のないものに不死の甘露があるとするのは正しくない。

678- 7

〔自在天は〕それより最上なるものは他になく、〔自在天は〕それより最勝なるものは他になく、それより微細なるものも他にはないので、これらの様々なものには唯一の因がある。〔なぜならば、最上なるものと、最勝なるものと、死せるものと、微細なるものは、プルシャと異なっていないからである。〕

679- 8

〔このように8種の属性(グナ)を具えていることにより、自在となる瑜伽行者のことを説いて言う。〕その瑜伽行者は、1) 極めて微細になりうる力と、2) 極めて粗大となりうる力を持ち、3) 極めて軽くなりうる力を持ち、4) 極めて重くなりうる力と、5) 自然の運行を支配する力と、6) 外界を支配し、他のものに支配されない力と、7) 欲望がそのまま実現する力があり、8) 瑜伽行者は欲するままに赴く。

〔そのプルシャは唯一であるが、種々多様な三界を支配する本質を持つものである。〕

680- 9

そこにおいては、一切有情がアートマンのうちに収められたことを見る。動くもの(動物)と動かざるもの(植物)である一切の生き物は全てアートマンそのもののうちに収められている。〔さらにまた、そのアートマンを観ずるならば、〕愚者と賢者と賤民とバラモンなどは全て等しい。つまりその時には、罪と障り、福德には差別がなくなっているため、平等であると理解すべきである。〔誰かが次のように問うならば、〕

681- 10

あたかも水瓶が〔新たに〕生じて滅するのように、虚空は水瓶の本質を持っていないため、体を持つ者には〔新たに〕生じて滅する性質がある。同様に、プルシャもまた、様々な体を持つ者を区別する相が生じ、滅を享受しつつあっても、体を持つ者の本質にはなっていないのである。

682- 11

たとえば、「アートマンは元々唯一であるが、水瓶の中の虚空のごとく、多数となれる。」と言うならば、その議論は正しくない。多くの水瓶が壊れる時、多くの水瓶の中の虚空は、分離されず、唯ひとつのものとして、全てが平等になると認められる。

683- 12

〔また、他の道理によってアートマンの同一性を確定しようとして述べる〕水瓶などは異なっているが、その質料因である土塊に関しては、いかなる別異性も存在しない。それと同様に、体は互いに異なっているも、アートマンに関してはいかなる別異性も存在しない。

684- 13

さらにまた、一つの水瓶の中の虚空が塵と煙に遮られた時も、一切の水瓶の虚空が遮られることにはならず、アートマンにおける楽などは、一つのアートマンが楽を得れば、一切のアートマンが楽を得ることにはならない。

〔仏教徒がアートマン論者に対して以前述べた論難を排除するために述べる。「これらの様々な人間には、どうやってそれぞれの心相続に楽と苦が生じるのか、と問うならば答えて言う。」〕

685- 14

〔個別の我が〕アートマンを知らず、理解しないことによっている。夢を見ている者が自我意識を起こすように。業が集積して、善と不善の果報を享受させるからである。

〔もし対論者が、(a) プルシャは行為の主体者であり、かつ、それを受用する者である。
(b) なぜならば、プルシャは罪と障りと福德を集め、また果報を受用するものであるから。
(c) 例えば、あなた方が主張するヴェーダーンタ哲学では、絶対者としてのプルシャが、
罪や障りなどを作り出すものとして存在するように。と言うならば、答えて言う〕

686- 15

〔プルシャは〕体の中にとどまっても執着することなく、〔諸々の対象に対して〕行動をするが、対象に汚されることがない。あたかも、王が欲するままに行動しても、罪悪によって害されることがないようなものである。〔プルシャもまた、一切のものの自在天であるが故に、罪悪をなしてもその果報を受ける器とはならない。〕

687- 16 p128

〔プルシャは、一切の体の自在天であるため、〕唯一で、〔全世界に遍満しているが故に〕遍在し、〔害されることがないので〕常住であり、〔涅槃を本質とするものなので〕梵天であり、〔優れた者であるため〕最高である。〔始めと終わりがないので〕不死であり、〔抛りどころであるが故に〕住居である。瑜伽行者が〔禅定の〕修習をするならば、彼は後の生存を受けることがなく〔輪廻に再び生まれることもない。〕

688- 17

〔善と不善とそれらの果報を受けることを滅したアートマンの特性を称えて言う〕それは常住にして無分別である。それは何者の対象ともならず、心（覚知）は分別によって区別されることにより、梵天（ブラフマン）という言葉結びつけることをなす。
〔ヴェーダの中に、自性について、善なきもの、無量の種子である闇と異なるプルシャについて説く聖典の言葉がある。〕

2) ヴェーダーンタ論者に対する仏教徒の反駁

689- 18

〔ヴェーダーンタ論者の前主張に関して、〕彼らの側の主張に陥らないことにより、これに関してまたこのように考察される。彼らの側の立場に執着することにより、覆われた心（覚知）によっては、このように真実を知ることはない。

〔真如の智慧を探求する第3章と、サーンキヤ学派、ヴァイーシュエシカ学派の真如を考察することに関連して述べる。〕

690- 19

〔ヴェーダーンタ学派が主張するように、〕「アートマンが存在する」という主張は否定されるため、有情の因もまたそのようである。故に、それを観じて解脱することは、まったく真実ではなく、非常に誇張されたものである。〔これは、ウサギの角は存在しないので、解放されないのと同様である〕

691- 20

〔プルシャが存在するという見解には次のような過失がある〕
諸々の畜生には生まれながらの有身見（我と我のものに対する我執）があるので、寂静は生じない。何故なら、有身見は一切の汚れの根本だからである。あなた方はそれを甚だしく増大させている。

692- 21

有身見に執着する者には、我に対する執着と、我が物に対する執着がある。故に、輪廻に依って生じるものが解脱である、と彼らは述べている。

〔我は色なり、我は色を持つ、色は我に属する、色の中に我が住する、我は受なり、我は受を持つ、受は我に属する、受の中に我が住する、などという 20 の有身見の高山の峰を征服して、真理を観ずるのであると一切智者より教示されたのに、顛倒した見解を持ち、我と我のものとの執着の悪魔につかれて慢心するあなたは、「それに基づいて輪廻が出現するところのものが解脱の原因である」と述べている。例えば、炎となったその火を見て、それを消すために吹いて、そのためにかえって火を増大させるようなものである。〕

693- 22

酔った者に対する酔いのように、その事情によって煩惱が減するならば、はなはだしい消化不良の病にかかった者にとっても、食物を食べることによって利益があることになる。

694- 23

ヴェーダーンタ論者は、アートマンは2種であると想定している。つまり、体という束縛されたアートマンと、最上なるものに住する解脱したアートマンである。

695- 24

執着はアートマンを対象としたものだが、アートマンという観念に対応する物は存在しない。〔これはアートマンである、と執着するが故に、体に関する私の観念が生じる。〕

〔また、もしアートマン論者が、〕長期にわたって、アートマンであると執着した習気のためによって、この集合に対してアートマンという分別が存在する、と言うならば、分別と言う働きによって、いかなるものも成立しないから、〔それ故に言う。〕

696- 25

分別という働きによってアートマンが存在するとしても、あなた方にアートマンは何の用があるのか？「色、声などの諸々の対象に対する心（覚知）の主体である」というならば、その議論は正しくない。

697- 26

〔その理由は何故か、と問うならば、〕一切の体の自在天であるプルシャを分別することもなく、色などの対象に対する諸々の観念は、主体者であるアートマンが存在しなくても生起する。何故ならば、条件に依存して生起するからである。

698- 27

また、字音を本性となす語（音声）の主体者はアートマンではないと主張する。何故なら、聞くべきものだから。また音声であるが故に、例えば、やまびこの反響のように。〔アートマンによって作り出されたものではないようなものである〕

699- 28

これによって、体の他の動作である来ること、行くこと、手足を動かすこと、〔食べること、寝ることなど〕の残りの諸々の相もまた、アートマンの働きであることを否定している。

〔そうであるならば、体、知覚能力、意識、対象以外のアートマンは存在せず、個別の現れを断ち切って、以前見た対象を全て知り、体験することにより、憶念からのちに思い出して、名前の意味を個別に混ざることなく明らかによく調べる意識より、このような智慧によって体験することから楽と苦の感受、想（識別）、触れること、禅定などが働くとして述べている。と言うならば、〕

700- 29

区別して一切を知ることにより、想（識別）がある。全知は憶念から生じる。それぞれ分別する智慧より、智慧がある。楽、苦、不苦不楽として対象を感受するが故に、受である。

〔これを要約してこのように述べる〕 (a) アートマンは真実に存在することはない。 (b) アートマンは、作用の特性がないから。 (c) 例えば、虚空の華のように。

701- 30 〔プルシャ論者の主張と、その議論に対する反駁〕

もし、「アートマンは認識などの働きをなすものである」というならば、知る働きをなすものは、器官そのもののみであると確定する。あるいはまた、それとは異なる主体者、例えば、草を刈ることをなすもののように、主体者は道理にあっていない。

〔アートマンである主体者を想定することがどうして道理にかなっていないのか、と問うならば、答えて言う。〕

702- 31

〔あなたの論によるならば、〕主体者は縁（間接的条件）を持つが、道具に縁は存在しないので、それ故あなたに提示する理由は成立しない。あるいはまた、その理由は不確かなものとなる。

〔眼は本質的に見る働きであり、他の耳などの器官が見るのではない。〕

703-32

認識などが主体者そのものである。主体者という言葉によって述べられるからである。デーヴァダッタが刈るという時、主体者と認められるようなものである。

704-33

〔プルシャは知覚されないものであるから、集合に属さずに主体者と呼ばれているのではない。ということを読いて言う。〕

作用を離れた有為の蘊に対して、主体者と呼ぶべきである。何故ならば、作用をなすためだからである。あたかも灯火によって、明瞭にする場合のようなものである。

〔ここで他派の人が、「アートマンこそ最高者である。その主な主体者に依存することが一切の作用に入ることであり、灯火などは仮に立てられたものである。陶工について言うならば、泥土などの多くの縁（条件）が近くに存在していても、陶工そのものが主体者であるようなものである」と言うならば、これに対して次のように反駁する。〕

705-34

勝義においては、アートマンは唯一の主な行為者ではない。何故ならば、陶工（陶器を作る人）など一つのものによって水瓶を作ることにはできないからである。それ故、灯明など多数の因が水瓶の主体者である。仮に設けたものをそれらの内部に想定しているのではない。

706-35

貪欲などの自在天の心は、色などの対象に欲望を持ち、現に執着するもの心は、解脱と逆の方に向かい、輪廻の牢獄に束縛されている。

707-36

〔世俗において、心所が現れることに関して、あなたが名付けたアートマンは存在しないが、〕手、頭、足、意識」などの集合が、心を持つ有情と言われる。物を施すなどの心が存在するものは、物を施す者と呼ばれる。すなわち、外的、内的にも物を施す心が生じるものを施主と呼ぶべきである。

708-37

〔無我を理解する智慧が〕生じることにより、無明などの結果が退けられたので、〔輪廻における〕貪欲などの煩悩の束縛から退くことになる。それを、解脱する者と言う。

709-38

〔また、他の非仏教徒たちによって仮に想定された〕虚空のごときアートマンについては、これら一切を説くことは難しい。もし〔あなたが特に〕アートマンに執着するならば、虚空の華がアートマンであると認めることになるだろう。

710-39

もしアートマンが、自性によって認識の本質であると主張するならば、行為をなすことなどに依存するため、そのようなアートマンが一つのものであるとして存在するというのは不合理である。

711-40

〔あなた方の説によると、〕もしアートマンなどの認識対象が存在するならば、その本質となる認識の止滅は起こらない。〔明らかに照らし出すなどの〕機能を果たした灯明もまた、〔油や木などの〕因から生じることが見られる。

712-41

心に知る働きが生じる間は、〔輪廻の〕種なども生じる。例えば、声が存在する間は、反響（こだま）が生起するようなものである。

713-42

声が活動して存在している間は、反響（こだま）もまた生起するが、声の活動が存在しないときは、反響もまた生起することはない。行為者が存在しないのに、意識が輪廻すると言うならば、どうやってそれが認識作用になるというのか。遍満することのないものだから、何によって束縛と解脱があるというのか。

714-43

〔さらにまたプルシャは、一切の事物と異なるので、〕 (a) プルシャは苦より解脱することはない。(b) 何故ならば、プルシャはすでに解脱しており、常に同一であると言われていたから、それはアートマンと異なるから。(c) あたかも火と熱の関係のようなものである。

715-44

害された観念と、生じていない観念とは、器官がなければどうやって存在しうると言うのか。プルナと言う人が草を刈る動作をすることもまた、斧がなければどうやって〔刈る人という呼称が〕正当なものとなるのか。

〔もし反論者が、「あたかも火によって焼くのだが、人間は『火が焼く』と言うように、認識作用によって知るのであっても、実はプルシャが知るといのが正しいのであり、認識作用が知るのではない」というならば、この議論は正しくない。〕

716-45

「火が〔薪を〕焦がす」と言う時、〔実際には火が焦がす者であり、主体者が焦がすのではない。「心を知る」という表現をすることにより、認識作用が知るのであり、プルシャが知るのではない。〔このように、陶器を作る人がまだ陶器を作っていない時も、陶器を作る人と言うし、火がまだ薪を焦がしていない時も、火が焦がすと言う。同様に、プルシャも行為をすることに依存しなくても、認識作用の自性であると述べるべきである、と言うならば、その答えを述べると、〕

717-46 p133

(a) 陶器を作る人と述べるように、プルシャが認識作用の自性であるということは成立していない。(b) 何故ならば、その本質がないからである。(a) また、火のように成立するとは認められない。何故ならば、焼かれるべきものがなければ、火は存在しないからである。

718-47

もし、認識作用のない〔主体者と〕行為をなさない〔享受者〕がいるならば、あなたはそれをどう表現して知るのか。虚空のごとき〔空性をしること〕と分別が何もなくても、〔ヴェーダーンタの真実がない〕聖典のみによっていかに究明することができるというのか。

719-48

何も認識しないこと、あるいは、認識作用がないならば、それは事物ではなく、〔あなたが主張するこのアートマンは、〕例えば石女の息子と呼ぶようなものである。

720-49

(a) 何かに害を与えたり、利益をあたえたりするものから害と楽は生じない。(b) それはこのアートマンには不合理だからである。(c) 例えば、虚空とデーヴシャルマンという人のように。

721-50

もし、部分的なアートマンに〔束縛があり、〕禅定の知によってそれが個別なアートマンから解脱する、というならば、アートマンは存在しないという目的に努めることによって、どうやって死が不死となりうるというのか。

722-51

〔対論者が言う。〕部分的なアートマンは、最高のアートマンとは別異である、というならば、以前に「すべてのアートマン（プルシャ）は、虚空のように一つであるとすでに受け入れているので、それは部分的なアートマンであり、二元と外と内が別異であると受け入れることで、以前の誓約が衰退している。

723-52

その部分的なアートマンは、最高のアートマンと異なることはない、というならば、またその誓約が衰退する。さらにまた、アートマンの苦楽などは、他の有情によって知られることはなく、根本のプルシャ（アートマン）は一つではない。

724-53

〔また、対論者に対して次のように主張するべきである〕
もしアートマンが微細なものであるならば、これは大ではない。大であるとするならば、微細であることはない。一切のアートマンは、唯一なるものでもない。

〔ここで論敵が象をたとえとして、〕

725- 54

アートマンは、唯一であり多数の本質であるという主張は、多数の生まれついで盲人が手で触って、それぞれの象を把握するというこの例えは不合理であると示されている。鼻が象であるとは主張していないから。鼻など様々なものも、一つの象ではないようなものである。

726- 55

またアートマンには、太陽などの色があるというならば、〔アートマンには色（物質的存在）がなく、色などもないとすでに受け入れているからである。太陽に色があると言うならば、〕 どうして色と離れることなどあるだろうか。例えば、パラージャの木のように、様々な部分を離れているとは考えられないからである。

727- 56

一つのものであるパラージャの木は存在しない。何故ならば、変化する本質と、根などのように多くのものから成り、縁などによって分割されるからである。

〔また、次のような大きな過失も存在する〕

728- 57

アートマンの主要性と最上性はそれとは異なる〔多くの〕ものに依存して認められる。故に、アートマンのみが実在する唯一のものであるとするならば、この道理が存在することをどうやって許容できるというのか。

729- 58

もしそのアートマンが実体であるとするならば、実体であるが故に遍在するものではない。あたかも水瓶のごとく、常住ではない。それ故に、広がる世界のごとくである。

730- 59

実体として存在する事物が拠り所となるべきものであるというならば、アートマンに実体があるということは正しくない。アートマンはあたかも虚空の華のように、不生のものなるが故に、実体がない。

731- 60

〔アートマンは実体として成立していないので、〕 全てはこれから生じるものと、すでに生じたものと、今生じつつあるものと、これから生じるべきものを、一切は無我なりと、如実に観ずべきである。

〔アートマンは実体のないものであるが故に、〕

無我をアートマンとすることは正しくない。あたかも、〔虚空の華などが〕 実体のないものの本質のようなものである。

732- 61

愚者たちの区別が存在しないことは成立しない。拠り所がないことと、たとえがないことの故に。アートマンが一つであるとするならば、多くの過失が生起することになる。

733- 62

(a) チャイトラのアートマンは、マイトラのアートマンとしても働く。(b) マイトラのアートマンについてもそれと同様だからである。チャイトラと異なることがないから。また対象に関しても、区別は存在しないから。

734- 63

チャイトラが楽と苦の享受と離れることによって、マイトラが解脱し、チャイトラの束縛によってもマイトラが束縛し、またチャイトラの苦によってもマイトラが苦しみとなる。

(ヴェーダーンタ説によると、アートマンは唯一である。故に、チャイトラのアートマンが楽を得たとき、マイトラのアートマンも楽あるものとなり、チャイトラのアートマンが解脱した時は、マイトラのアートマンもまた解脱する。マイトラのアートマンが束縛された時は、

チャイトラのアートマンもまた束縛を得る。チャイトラのアートマンが苦あるものとなった時は、マイトラのアートマンも苦あるものとなる。)

735- 64

水瓶の中の虚空がたとえとして示されたのも、それは全てに生じるわけではない。楽と苦の中に生じているのではないという意味である。〔どうしてか、と問うならば、〕虚空は一つであるとするあなた方の例えは成立しないからである。提示された虚空の例えは、まったく成立しないものである。何故ならば、

736- 65

実体の本質となる空は、言説による〔すべての世俗としてよく知られている〕虚空である。その中に動きのある世界があり、それは行くことのできる者に行く機会があり、その余地を持つものである。

〔我々は経量部の見解に従って、「虚空とは障りをもたらず実体の無自性である」として、唯一なるアートマンを勝義においてではなく、世俗の真理として承認するのだから、それは実体ではない。〕

737- 66

故に、虚空には障礙がないわけではない。また、その機会を与えるかどうかのどちらでもない。虚空は存在するということの因を述べても、この因は不成立である。虚空は実体として認められていないからである。

〔また、もし反論者が、「虚空は存在する。障礙がないという特性を持つものだから。あるいは、機会を与える働きを所有するものだから。存在しないウサギの角には、障りとなるものがないという特性と、機会を与えることは存在しない」と言うならば、〕

738- 67

〔論師は言う。〕虚空は一つではなく、虚空には実体があるとは認められない。それは唯一でもない。あたかも、石女の息子のように。

739- 68

水瓶などの本質となる諸々の土は、大地の種類であることに関しては同一であるが、粘土などは互いに異なるようなものである。故にアートマンは唯一ではない。

740- 69

アートマンが存在することを知らず、アートマンを理解しないのは、夢にはプライドがないようなものである。認識作用が顛倒していなければ、〔アートマンが存在しない〕この意識にプライドが生じるというのは不合理である。

〔アートマンが認識作用を持つとするならば、顛倒することがないので、この認識作用が自我意識を起こすというのは正しくない。アートマンが認識作用を持たないとするのも、また顛倒することがないので、認識作用がなければ自我意識を持つことはない。〕

741- 70

アートマンが存在することを知らなくても、顛倒がないのだから、アートマンが存在することを知らずにプライドが存在するとは認められない。〔あなたが存在すると主張しているアートマンは、〕虚空のように不変であり、同様に、何に対しても執着がないからである。

742- 71

アートマンは主体者としては不合理である。享受者としても不合理である。主体者であるアートマンが〔永遠〕である必要はなく、主体者の果報が〔存在することを〕認めてもそれがどうして正しいと言えるのか。

743- 72

人の知覚能力は〔殺生し、盗みを働くなどの〕罪を犯しているため、王者の例えは不合理である。外〔と内の法〕に依存することがないので、唯一の自性としては不合理である。

〔二元性のない唯一の者とは、多数の貧しい人間のうちで国王が唯一の者と呼ばれ、内外の多くの人間に依存して、人間の唯一の主と呼ばれるようなものである。〕

744- 73

唯一という本質を持っているというならば、アートマンは唯一性を持っているのでもない。
〔対論者が、〕対象と対象を持つものとしての本質は多数であると決められているのではないから、それを明らかにすることによって、アートマンが唯一の者であるというならば、

745-74

〔もしヴェーダーンタ論者が〕このように、〔多数であるという考えを明らかにするには、アートマンが唯一であるという考えは世俗のものなので、もしそうであるならば、〔あなたが主張する〕唯一は勝義における唯一ではない。〕

746-75

常住で唯一であるなどという自性が成立することにより、勝義における〔アートマンが〕存在すると言うならば、〔常住で〕唯一であるなどの言葉と心が従事し、勝義において存在するならば過失は存在しないが、唯一であり、〔常住であり、遍満する〕などという様々な分別によって述べられるものは、どうして述べられているように無常の本質なのか。

747-76

様々な分別の心の対象とその意味に、〔言説という世俗において〕言葉を従事させることを否定しているのではない。このように、〔アートマン、つまりプルシャが〕心の対象ではなく、言葉の享受対象ではないというならば、

748-77

言葉で述べることもできず、分別もないならば、以前に示した通り論理的に分析してみるとそれは偽りであり、〔このように世俗の錯乱という6つの知覚能力の対象となる〕知るべき認識対象は、勝義において始まりなき遠い昔から不生であり、成立していないので、〔勝義を見る聖者たちの〕心の対象として見ることは正しくない。

3) 結び：仏教徒の説とヴェーダーンタ論者の説との対比

749-78

〔聖者たちの〕心の対象を退けるなら、言葉の対象からも退く〔べきであると述べられているので、〕如来が偽りを述べることはなく、偽りのないこの流儀は最勝なる善であると知って、

750-79

このように〔如来たちのお言葉に対して〕非仏教徒たちの主張が生じ、それに対して私のものという執着が〔あるものたちに〕生じる。前後における矛盾のみが生じることにより、非仏教徒たちの流儀は〔プトガラ、仏陀のお言葉に〕まったく一貫しないため、例えば、針と如意樹の二つが同一でないようなものである。

751-80

〔また、もし反論者が、〕「中観論者もまた、有我と無我、空と不空、生起と不生、実体と無自性を語っているので、彼らにとっても大いなる矛盾が起きるではないか」というならば、このように、この教えにおいて、ある人々が正直なるが故に、また余りの執着に捉われて退けたために、様々な教えが説かれたのである。

752-81

諸々の事物は〔勝義において〕生起しない。自性〔という因と条件〕によって作り出された本質は存在しないからである。この境地においては衰退することがないので、アートマンとも呼ばれている。

753-82

異なる〔現れを持つ〕事物であっても〔勝義における自性がないことと、不生であることには〕区別がないので、一つの本質であるから同一である。〔自性がなく、不生で、特徴がないなどによって〕全てに遍満する一切法であるため、常住でもあり、衰退することがない。

754-83

不生であるため、生じることがなく、真如であるため、老化と死もない。転移することもないので、ここから移動することもない。最高の究極であるため、最も優れたものである。

755-84

〔勝義においては〕色、声、香などではない。地、火、水、風でもない。虚空、月、太陽でもない。意と知の特徴でもない。

756-85

一切はこれであり、自性であるため、衰退することがないので一切ではない。そこに煩惱が生じることはないので、これは清浄であり、これは寂静である。

757-86

またこれは〔真如と言われているものではなく、〕分別によって誇張されて、〔世俗において他者を理解させるために述べたものなので〕正しく述べられているものではない。無始の時より述べられる対象ではないため、これには汚れと過失は何もないと示されている。

758-87

何でもあなたがこのように現に認めるものが、アートマンであるというならば、名前などの多くの似たものが過失なく道理に合うことになる。

759-88

故に、無我を恐れる者たちは、恐れると言いつつ真如にとどまる。例えば、愚か者たちは虚空を恐れても、虚空以外に他にとどまる場所がないようなものである。それと同様に、あなたもまた無我を恐れても、その無我に依存してとどまっている。なぜならば、それとは別にとどまる場所がないからである。

760-89

仏陀は全世界の友であり、真如は最勝なる甘露である。無我に対しては、ここではいかなる者もこれを否定することはないので、善く来れる者（善逝）はこれに満足するべきである。

761-90

正しい見解（正見）を覆うものは何もないので、主体者、享受者、常住、遍在などの土台となるアートマンに依存することなく、それによって虚妄なる執着を断じることのみをなすべきである。

762-91

外と内の全ての事物は、自性によって生じることがないため、真如においては不生であると認められている。自性によって不生であることは、〔この無我の〕自性であると示されている。

763-92

もし、事物がなにもないことが無我ならば、それはアートマンなのではない。なぜなら両者は矛盾するからである。「無我が我となる」というならば、牛でないものも牛となる。（無我が我となることはない）

764-93

事物の自性が成立しないことが、どうして主体者や享受者になるというのか。それは、石女の息子が行為者と果報を受ける享受者でないのと同様である。

765-94

そのようなものにどうして生起があるだろうか。それにより、衰退することなどがどうしてあろうか。〔たとえば、〕虚空の華が存在しないように、生滅が仮に設けられたようなものである。

766-95

無自性である諸々の対象に対して心（知）が働く間は、〔あるかないかなど偽りの〕心によって誇張することにより、〔一つや多数〕などがあると認められている。

767-96

〔様々な対象に対して〕分別を持ち、〔対象がないものには〕分別もなく、正しい見解を見出したその時、誤った見解を持つ心は退いていく。その時、心には一切の戯論の対象はなく、否定と成立の一切の戯論が鎮まり、寂静となる。

以上が、〔ケンチェン・クンガ・ワンチュクの〕『中観心論註』より「ヴェーダーンタ学派の真如に入る」と言われる第8章である。

【日本語試訳：マリア・リンチェン2019年2月】